IS〈インフィニット・ストラトス〉～空の英雄達～

MSF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉～空の英雄達～

【Ｎコード】

Ｎ４１０７Ｑ

【作者名】

ＭＳＦ

【あらすじ】

キラ、アスラン、シンの三人が任務中に謎の光に飲み込まれ別の世界に跳ばされてしまうお話です

プロローグ（前書き）

駄文です
こんなのでよければ温かく見守ってください

プロローグ

C．E．７４　メサイア攻防戦はプラント最高評議会議長ギルバート・デュランダルの戦死と宇宙要塞メサイアの陥落により幕を閉じた

あれから数ヶ月後、大戦の英雄であるキラ・ヤマトは最高評議会議長であり、最愛の人でもあるラクス・クラインからある依頼をされていた

◇

「磁場の歪みの調査？」

「はい、キラもそのことは知っているでしょう？」

「うん。確かに知ってるけど、でもあれは特に害はなかったはずだけど」

磁場の歪みが発生したのはここ１ヶ月ほどであり、当然調査隊を派遣したのだが周囲に原因になりそうなもはなく、また、通信やモビルスーツの運用などに全く影響がないことから放置されていたのだ

「確かにそうだったのですが最近になって通信が乱れたり、近くを通過したＭＳや船が一時的に機能停止になることがある、との報告が来ているのです」

「でもそれならフリーダムも機能停止になっちゃうんじゃないの？」

「いえ、磁場のレベルからフリーダムには影響は出ないと思います」

「わかった。これから磁場の歪みのあるエリアに向かうね」
「はい。あとこの任務はオーブと共同任務となります」
「オーブとの？」
「はい。あちらはアスランとシンさんを向かわせる、とのことです」
「わかった、それじゃ」
「はい、お願いします」

◇

その後パイロットスーツに着替えたキラはストライクフリーダムに乗り込んだ
（アスランとシンに会うのも久しぶりだな）
『ストライクフリーダム、発進どうぞ』
「了解。キラ・ヤマト、フリーダムいきます！」

◇

磁場の歪みが確認されたエリアにはすでにアスランとシンが到着していた
「キラはまだ着いていないようだな」

「みたいだね。とりあえずどうするの？アスラン」

「ひとまずキラが来るのを待とう。方針を考えるのはそれからだ』

「了解」

◇

5分後

「ん？あれは・・・」

「どうした？シン」

「いやなんかこっちに向かってきてるのが・・・あ！あれフリーダムだ」

「そうかキラが来たか」

そうしてフリーダムは二機と合流した

「遅いですよキラさん」

「ごめん、待たせちゃったかな」

「気にするな。俺達も5分ほど前に着いたばかりだ。それよりこれからどうするのか話し合おう」

「話し合うって調査の方針について？」

「まあ、それしかないと思うけど」

「でもここデブリのひとつすらありませんよ？」

「「・・・・・・・・」」

そう、磁場の歪みが発生したエリアには何もないのだ

そして沈黙と何とも言えない空気が三人を包み込む

「いや、でももしかしたらミラージュコロイドを使ってたり・・・する・・・かも」

最後の方はもはや小声になり、ついには黙ってしまった

そうしてどれくらい時間がたったか突然のアラートに沈黙が破られた

「「「！！！！」」」

だがエースパイロットである彼らは瞬時に思考を切り替えた

だが気づいたときには遅かった

フリーダムの後ろから謎の光が迫ってきていたのである

「キラさん後ろ！」

「何！？」

「えっ！？」

フリーダムは光に飲み込まれそうになったがギリギリのところでジャスティスとデスティニーに助けられた

三機は何とか光から逃れようとするも徐々にその距離は縮んでいった

「あの光僕たちを飲み込もうとしてるのか！？」

「なんなんだあの光は！？速すぎる！！」

「詮索は後だ！今は・・・」

そして光は三機を完全に包み込んだ

そして光が消えるとそこには何もなかった

ＩＳ学園

ＩＳ学園　職員室

ＩＳ学園の教師である織斑千冬は現在暇をもてあましていた

（暇だ、午前中に仕事が終わったせいで全くやることがない。今は春休み中なので馬鹿共がいないので静かなのはいいが、やることがないので暇でだ。一夏の様子を見に行きたいが、今日は当直だからそういうわけにもいかんな）

「織斑先生、お茶をどうぞ」

「ああ、ありがとうございます。山田先生」

「いえいえ。それよりもあのニュースは驚きました」

「ああ、あのニュースですか」

あのニュース、それは本来女性しか使用できないはずのＩＳを使うことができる男性が現れた、というものである。ちなみにその男の名前は織斑一夏。千冬の弟である

「やっぱり織斑先生の弟でからでしょうか」

「それは関係ないと思いますよ」

「それもそうですね」

そうして世間話をしていると放送が入った

『第二アリーナに異常事態発生。当直の先生は直ちに第2アリーナに向かってください』

「ふむ、山田先生急いで第2アリーナに向かいましょう」

「は、はい！」

◇

SIDE千冬

第2アリーナ

（アリーナに着いたが、異常は見あたらないな）

「見たところ異常はなさそうですね」

「ええ。しかしいったいどういうことだ？計器の誤作動は考えづらいし・・・」

「異常はないようですし戻りますか？」

「いえ、一応、っ！山田先生上です！」

「えっ！？」

そして振り向いた先には空間の歪みがあった

（空間が歪んでいる！？いったい何が起きている！）

そして次の瞬間歪みは黒い穴へと変化した。さらに人が三人落ちてきた

その光景に二人は呆然としていた

「織斑先生、彼らはいったい・・・」

「わかりません。しかしこのままにしておくわけにもいきませんね。山田先生、彼らを運ぶのでほかの先生を呼んできてください。」

「は、はい！」

そういって山田先生はアリーナを出て行った

（さて、こいつらが着ているのは・・・パイロットスーツか。となると軍人であるのは間違いないな。いったいどこの国の軍だ？まあ、それはこいつらが目を覚ましたら聞き出せばいい。）

「一応念のため顔を見させてもらおう。」

そういうとヘルメットをはずした

（三人とも男。年は１５歳くらいか。ん、これは・・）

三人を観察しているとある物が目に入った

（これはアクセサリーか？いや違う、これは・・・まさかＩＳか！？だが男はＩＳを使うとはできない。それなのになぜ？・・・まさか！）

千冬の脳裏に思い浮かんだのは自分の弟がＩＳを使えるというニュースだった

（こいつらもＩＳを使えるのか！確かにそれなら所持しているのも納得できる。だがほかにもＩＳを使える男がいるなんて情報は・・・）

そうして思考に没頭していると

「織斑先生ーほかの先生方をお連れしました。」

「わかりました。ひとまず彼らを懲罰部屋に運びましょう。」

（考えるのは後だ。今はこいつらを運ぶとしよう。）

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥシン

目を開けるとまず目に入ったのは白い天井だった

「あれ、ここは・・・」

（確か任務の途中に変な光に飲み込まれたんだ）

「アスラン、シンが気づいたみたい」

「そうか。シン体の調子はどうだ？」

「問題はない。それよりアスラン、キラさん、ここどこなの？」

「残念だがわからない。調べようと思ったんだがあれがあるからな。」

そういってアスランは天井の隅を見た。その視線を追うとそこには監視カメラが設置されていた。

「それにこの部屋には鍵がかけられている。」

「え、なんで！？」

「当然だと思うよ。僕たちはここの人からしてみれば不審者みたいなものなんだし。」

「不審者・・・」

（なだか軽く凹む・・・）

「どうやら三人とも目が覚めたようだな」

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

「どうやら三人とも目が覚めたようだな」

振り向くとドアの所にスーツを着た女性がったたていた

（この人、強い・・・間違いなくエースクラスだ）

「あなたは誰ですが？」

「私は織斑千冬。ここＩＳ学園で教師をしている。おまえ達に聞きたいのは二つ。我々に敵意があるのか、そしてどうやってここに侵入したのか。この二つだ。」

「僕たちに敵意はありません。そちらが手を出さなければ、ですが。それとどうやって侵入したのかはわかりません。僕たちは任務の途中おかしな光に包まれて、気づいたらここにいました。」

「それは本当か？」

「本当です」

「「・・・・・・」」

「わかった信じよう」

「ありがとございます」

どうやら信じてくれるようだ

「そんなにあっさり信じていいんですか？オレ達が嘘をついてるかもしれないのに」

とシンが聞く。確かにこうもあっさり信じてもらえると少し心配になる

「心配するな。別に無条件で信じているわけでわない。嘘をついているかどうかはかどうかは相手の目を見ればわかる。そして私はおまえ達の目を見て嘘をついていないと判断した。」

「はあ、そうなんですか」

「ああ、そうだ。そういえばまだ名前を聞いていなかったな。」

「そういえばそうでね。じゃまず僕から。プラントザフト軍所属キラ・ヤマトです」

「地球連合オーブ軍所属アスラン・ザラです。」

「同じく地球連合オーブ軍所属シン・アスカです。」

その後の織斑さんの反応は三人の予想外のものだった

「オーブとプラントという名前の国は聞いたことないぞ。それに地球連合なんて組織は存在しない。それより次はこちらの質問だ。おまえ達が所持していたＩＳ。あれはどこで手に入れた？」

「あの、質問よろしいですか？」

「何だ、ザラ」

「アイ・エスって何ですか？」

「おまえ達は軍人なのだろう？なのに軍の主力であるＩＳを知らないのか？」

「知りません。というか軍の主力はＭＳではないのですか？」

「モビルスーツ？なんだそれは？」

「ＭＳをしらないいんですか？」

「ああ、知らん」

どうやら本当に知らないようだ。でもアスランの質問のおかげでひとつの結論が出てきた

「ねえ、アスランもしかして・・・」

「キラもか」

どうやらアスランは僕と同じ推測にたどり着いたようだ

「どうしたんだ二人とも？できれば説明してもらいたいのだが」

「えっとですね、この世界は僕たちが住んでいたのとは別の世界である、というのが僕とアスランが出した結論です。」

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥアスラン

「そう思った理由を教えてくれるか」

さすがにそう簡単には信じられないようだ。できれば俺達だって信じたくはない。だがこうでもなければ辻褄が合わない

「理由は二つあります。一つ目はあなたがプラントと地球連合のことを知らなかったこと。俺達が住んでいた世界で連合とプラントのことは全ての人間が知っていることで、知らないと言うことは絶対にあり得ないから。二つ目はあなた方の世界では軍の主力がＭＳではなくＩＳであり、それを俺達が知らないということは両陣営のどちらにも配備されたことがないということから俺達の世界には存在しないものであるということ。この二つから俺達が住んでいたのとは別の世界であると推測します。」

「なるほど。確かにほかの世界から来たというなら辻褄が合うな。では私はおまえ達の処遇についての会議があるのでこれで失礼する。結論が出次第知らせに来る。」

そういって彼女は部屋から出て行った

「オレ達どうなるんだろ」

「敵意がないことは伝えたから、悪いようにはならないとを思うが」

「とにかく今は会議の結論が出るまで待つしかないよ」

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥシン

３０分後

織斑さんが戻ってきた。どうやら会議の結果が出たようだ

「会議の結果が出た。おまえ達の所持していたＩＳ、後立場および境遇からこちらで保護することになった。なおその際三人には学園に入学してもらう。いっておくが拒否権はない。」

「入学するのは構いませんけど僕達戸籍とかありませんよ？それに僕達にもＩＳって使えるんですか？」

「戸籍はこちらで用意する。ＩＳは三人とも使える。気絶している間に調べさせてもらった。適正値は三人ともＡランクであるため問題はない。」

「俺達の境遇というのはわかりますが立場ってどういうことですが？」

「そのことについて説明するにはまずＩＳについて説明する必要があるな。」

ＩＳ－正式名称『インフィニット・ストラトス』

ＩＳは宇宙での活動を想定したマルチフォームスーツである。しかし『制作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まなかった。結果このスペックをもてあました機体は『兵器』へと変わった。しかし各国の思惑から『スポーツ』へと落ち着いた。しかし『ＩＳ』が有

事の際の防衛力であるのは変わらなかった。だが『ＩＳ』には致命的な欠陥があり、女性しか扱うことができなのだ。

「そしてこのＩＳの登場により社会も男女平等から女尊男卑へと変わった。ヤマト、理由を答えてみろ。」

いきなりキラさんが指名された

（まるで授業みたいだな。）

「えっと、有事の際の防衛力であるＩＳを使えるのは女性だけであるため政府は次々と女性優遇策を導入していき、『女性＝偉い』という構図ができあがったからですか」

「そのとうりだ。まあ、ほとんどの女性は男性の社会的立場を認めているがな。とりあえず説明はこんなところか。ＩＳの詳しいことに関しては参考書を発行するので必ず読んでおくように。」

「「「はい！」」」

「それと話は変わるが今から手続きをしても入学式当日には間に合わないのでおまえ達は編入という扱いになる。それとおまえ達は宿直室を使え。以上だ。」

ＩＳ学園（後書き）

作「次回はいよいよキラ達が学園に編入します。」

キ「そういえばアスランとシンはなんで織斑先生に質問するとき『質問よろしいですか』って聞いてたの？」

ア「あの人を見てたらなぜか訓練校の教官を思い出してな。」

キ「へ～そうなんだ。シンも同じ？」

シ「うん、多分そう。それにあの人には絶対に逆らっちゃいけない。鬼教官のにおいがした」

作＆キ＆ア「「「どんなにおいだよ！」」」

シ「においというか第六感的なもの」

ア「ようは勘ということか」

キ「まあ、実際シンの勘はよく当たるし。」

ア「そうだな。」

作「どうやら向こうも一段落付いたみたいだね。それでは次回『編入』」

キ＆ア＆シ「「「お楽しみにー！」」」

誤字脱字、感想よろしくお願いします

編入

ＩＳ学園　入学式当日

真耶「全員揃ってますねー。それじゃーＳＨＲはじめますねー。」

黒板の前でにっこり微笑むのは副担任である山田真耶先生である

真耶「それでは一年間よろしくお願いしますね。」

「……」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれているため、誰からも反応がない。なぜなら２７人いる生徒の中に１人だけ男子がいるからだ

真耶「じゃ、じゃ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ＳＩＤＥ一夏

（これは……想像以上にきつい……）

自意識過剰ではなく本当に、クラスメイト全員からの視線を感じる。

だいたい席も悪い。何で真ん中&最前列という最も目立ち注目を浴びる席なんだ！

オレは何かしらの救いを求めて窓側の方に目をやるが、薄情なことに幼なじみの篠ノ之箒は窓の外に目をそらした

（なぜ！？なぜ目を背けるのですか箒さん！！それが6年ぶりに再会した幼なじみに対する態度ですか！？……もしかして俺嫌われてる？）

そんなことを考えていると……

真耶「……君。織斑君っ」

一夏「は、はいっ！？」

いきなり大声で呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。案の定くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる

真耶「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ごめんね、ごめんね！でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

気が付くと副担任の山田先生がぺこぺこと頭を下げていた。その姿には教師の威厳はなく、同い年といわれれば受け入れてしまいそうだった

一夏「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

真耶「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばっと顔を上げ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。……あの、またすごい注目浴びているんですが

（まあ、するといった以上、男子たるもの引くわけにはいかない。それに最初で溝を作ると二度と修復できなさそうだし）

しっかりと立って、後ろを振り向く。今まで背中に感じていただけの視線が一斉に向けられているのを自覚し、一瞬たじろぎそうになるも何とか堪える

一夏「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

儀礼的に頭を下げて、上げる。――――ちょっと待て、なんだその『もっといろいろ喋ってよ』的な視線は。そしてこの『これで終わ

りじゃないよね？』的な空気は何だ。新手の拷問か？

（特に喋るかともないからな。無趣味ってわけじゃないが万人に聞いて欲しいとゆうほどでもないし。かといってここで何か喋らなければ『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまう。さすがにそれはさけたいところだ。どうする！どうする俺！？）

そして出した答えは――――――――

一夏「以上です」

がたたっ。思わずずっこける女子が数名。どんだけが期待してるんだよ。無茶いうな

「あ、あのー……」

背後からかけられる声。涙声成分が二割増している。あ、やっぱダメでした？

バアン！

いきなり頭を叩かれた

一夏「いっ――――――――！？」

叩かれた瞬間あることが頭をよぎった。

このたたき方、ある人物と全く同じなのだ

おそるおそる振り向くとそこにいたのは――――

一夏「げぇ、関羽！？」

バアン！

また叩かれた。ちなみにその音があまりに大きいため、女子が若干名引いている

千冬「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声。俺にはすでにドラの音が聞こえるのですが。

真耶「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

千冬「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

おお、俺が聞いたこともないような優しい声だ。これがいわゆる差

別というものか

真耶「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

さっきのまでの涙声はどこえやら、はにかみながら担当の先生に応えている

千冬「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育て上げるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

何という暴力宣言。だが、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が届いた

「キャーーーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

千冬「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスだけに馬鹿者を集中させてるのか？」

（千冬姉、人気は買えないんだからもうちょっと優しくしようぜ）

「きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして～！」

（大丈夫なのか、このクラス。少し心配になってくる。特に後半の発言をしたやつ）

千冬「で？おまえは挨拶も満足にできんのか、お前は」

一夏「いや、千冬姉、俺は――――」

バアン！本日三度目。なんか泣きそう

千冬「織斑先生と呼べ」

一夏「……はい、織斑先生」

――――と、このやりとりがまずかった。つまり、姉弟なのが教室中にばれたバレた。

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃ世界で唯一男で『ＩＳ』が使えるって言うのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ。」

最後のは放っておこう

千冬「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。それと席が三つ空いているがその席の奴らは諸事情により明日から来ることになっている。以上だ」

翌日　　◇

キラ達は職員室で千冬から説明を受けていた

千冬「まずお前達のクラスだが私が担当している１年１組だ。それとお前達には代表候補生になってもらう。正確にはヤマトは日本、ザラはギリシャ、アスカはスイスの候補生だ。なおこれは決定事項

であるため拒否権はない」

キラ「何で僕達が代表候補生になれるんですか？少なくともその国の国籍を持っている必要がありますよね。僕は日本だからまだしもアスランとシンは外国の国籍は持ってませんよ？」

千冬「国籍については問題ない。元々向こうから持ちかけてきた話だ。そのくらいは用意してもらったさ。それに国際ＩＳ委員会も承認済みだ。お前達が代表候補生になれるのはその国になれる奴がいないからだ。候補生になるには一定の条件をクリアしなければならないんだがお前達なら問題ないと言うことななった。それに伴いザラはギリシャから、アスカはスイスから来たことにする。それとお前達に渡すものがある」

そう言うと千冬は机の引き出しから三つのアクセサリーを取り出した

アスラン「それはなんですか？」

千冬「こいつお前達、というかお前達が持っていたＩＳだ。蒼い翼の付いているネックレスが『ストライクフリーダム』、紅い剣が付いているブレスレットが『インフィニットジャスティス』、紅い翼が付いたイヤリングが『デスティニー』だ。どれが自分のかわかるか？」

キラ「フリーダムは僕のです」

アスラン「俺のはジャスティスだな」

シン「デスティニーはオレのですね」

そう言って自分のＩＳをとっていった

千冬「そろそろチャイムが鳴るな。ほかのことは教室に移動しながら説明する。わからないことがあれば私の弟とクラスが一緒だからそいつに聞け。いいな」

三人「「「はい」」」

◇

千冬「それではさっき説明したとおり呼ばれたら入ってこい」

そう言って千冬は教室に入っていった

◇

ＳＩＤＥ一夏

千冬「さっさと席に着け。これよりＳＨＲを始める。まず昨日説明したと思うが諸事情によって遅れてきて奴らを紹介する。おい、入ってこい。」

（そういや三人遅れてくるっていってたっけ。どんな奴なんだろ）

そう思いながら入ってきた奴を見てみると、俺を含めてクラス全員が呆然とした

それもそうだろう。何せ三人とも男だったのだから

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

教室にはいると一斉に視線を向けられた

（さ、さすがにこれは緊張する。おまけにクラスメイトは僕達と織斑先生の弟以外は全員女子……。大丈夫かな）

そう思いアスランとシンの方をちらっと見てみると二人も少しばかり緊張しているようだ

（よかった、緊張してるのは僕だけじゃなかったんだ）

千冬「三人とも、自己紹介をしろ。ちなみに三人とも代表候補生だ。まずヤマトからだ」

キラ「あっ、はい。キラ・ヤマトです。みなさん一年間よろしくお願いします。」

次アスラン

アスラン「アスラン・ザラだ。ギリシャから来た。よろしくたのむ」

最後シン

シン「シン・アスカです。スイスから来ました。よろしくお願いします」

そうして自己紹介が終わった

（何でみんな呆然としてるんだろ？あっ、僕達が男だからか）

キラは本来女性しかＩＳを扱えないことを思い出しそう思った

「お、男……？」

誰かがそうつぶやいた

キラ「うん、そうだけど」

「き……」

シン「なに？」

アスラン「？」

（あっ、なんかいやな予感）

「「「きゃあああああああーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」」」

「男子！三人とも男子！しかも美形！」

「おまけにうちのクラス！」

「地球に生まれてよかったーーー！」

千冬「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生はそう言いながら耳栓をはずした

（いつの間に耳栓なんてしたんだろ。全然気づかなかった）

千冬「三人は空いてる席に着け。それではこれでＳＨＲを終わる。では解散！」

ＳＩＤＥＯＵＴ

◇

一時間目が終わり今は休み時間。一夏はキラ達に声をかけた

一夏「よお、三人とも」

キラ「君は？」

一夏「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。よろしくな」

アスラン「自己紹介はした方がいいか？」

一夏「いや、平気だ。それより三人とも代表候補生ってのは本当なのか？」

シン「本当だけど」

一夏「じゃあ頼みたいことがあるんだがいいか？」

アスラン「あまり無茶なことでなければ構わないが」

一夏「いや、大丈夫だ。そんなに無茶なことじゃない。俺にＩＳのことを教えてくれ」

シン「教えるくらいならいいんじゃないか？アスラン」

アスラン「まあ、それくらいならな。でも基礎理論のこととかなら先生に来た方がいいと思うぞ。俺達より詳しいだろうし教えるのもうまいだろうしな」

一夏「そうなのか？」

アスラン「ああ、そうだ」

一夏「じゃあとりあえず先生に頼んでみる。そういや三人はいつ頃代表候補生になったんだ？」

キラ「一夏がニュースに出てる頃」

一夏「そうなのか。じゃあ結構最近なんだな。そういや三人は授業わかるのか」

シン「わかるよ。参考書の内容覚えてればふつうにわかると思うけど」

一夏「えっ、でもあれかなり厚くなかったか？」

シン「うん。確か千ページくらいあったともうけど」

一夏「……覚えるのにどれくらいかかった？」

キラ「僕はだいたい２０時間くらい」

アスラン「俺もだいたいそれくらいだな」

シン「オレも」

一夏「……」

（あれだけの内容を覚えるのに一日もかからないなんて。これが持

つものと持たざるものの差なのか）

キーンコーンカーンコーン

キラ「あ、チャイムなったよ、一夏。席に戻らないと」

一夏「あ、ああ」

◇

２時間目

千冬「さて、授業を始める前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長みたいなものだ。それと今年から副代表も決めることになった。役割は代表の代理や補佐だ。ちなみに一度決まると一年間変更できないからそのつもりで」

ＳＩＤＥ一夏

オレは専門知識がゼロなので、全く意味がわからない。たぶん面倒な仕事が多いんだろうな。なる奴はご苦労様だ。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

――――――あれ、このクラス俺以外に織斑っていないはず。てことは――――

千冬「では候補者は織斑一夏……ほかにはいないか？自他推薦は問わないぞ」

――――――やっぱり

一夏「お、俺！？」

つい立ち上がってしまう。そして視線の一斉射撃。振り向かなくてもわかる、これは『彼ならきっと何とかしてくれる』という無責任かつ勝手な期待を込めた眼差しだ。

俺は救いを求めてキラ達の方を振り向くも三人に合掌された。あ、あいつら……

千冬「織斑。席に着け、邪魔だ。さてほかにいないのか」

一夏「キラを推薦します！」

キラ「ちょ！？一夏！？」

（悪いなキラ。こうなったお前を道連れにさせてもらう）

千冬「候補者は織り斑一夏、キラ・ヤマト。他にいなければこれで締め切るぞ」

？？？「待ってください！納得がいきませんわ！」

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥアスラン

バンッと机を叩いて立ち上がった人物を見ると知っている奴だった

（あいつは確かイギリス代表候補生セシリア・オルコットか。まずいな、あいつは完全に男を見下してるからな。あいつの発言でキラがキレなければいいが）

セシリア「そのような選出は認められません！だいたい男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

シン（ねえアスラン）

アスラン（どうしたシン？）

シン（オレキレていい？）

アスラン（ダメだ、お前が切れるとややこしくなる。それに放っておけばキラがキレるから任せておけばいい）

シン（どゆこと？）

アスラン（見ていればわかる）

セシリア「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

（お前程度が実力トップなどと言うか、笑わせてくれる。キラと一夏は、そろそろキレるか）

セシリア「大体、文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――――」

（あ、キレた）

一夏「イｇ「イギリスの自慢だって両手で数えられるくらいしかないでしょ」――キラ？」

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

一夏「イｇ「イギリスの自慢だって両手で数えられるくらいしかないでしょ」――キラ？」

やってしまった。どうやら僕は友達が馬鹿にされることに関しては沸点がかなり低い。何度か直そうと思ったけど無理だった

セシリア「なっ……！？」

こうなってはいくところまでいくしかないだろう

キラ「それに君が他の人より強いのは専用機持ちであり、稼働時間が長いからだし、代表候補生なのは他のイギリスの人より成績が良いからで他の人が君より良い成績を出せばすぐにでも候補生からおろされる。その『程度』のことでそこまで傲慢になれるとは、恐れ入るよ」

セシリア「あっ、あっ、あなたねえ！祖国のことだけではなく、祖国にいる人々のことまで侮辱しますの！？」

キラ「事実を言ったまでだよ」

セシリア「良いでしょう、決闘ですわ！」

キラ「受けて立つよ。四の五の言うよりわかりやすい」

セシリア「言っておきますけどわざと負けたりしたらわたくしの小間使い――――いえ、奴隷にしますわよ」

キラ「真剣勝負で手を抜くほど腐ってないよ」

セシリア「そう？何にせよちょうど良いですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

千冬「はぁ、決闘するのは構わんがな、一つだけ言っておくぞオルコット。ヤマトにハンデをつけてもらえ」

と、織り斑先生が言うとドッと爆笑がわき起こった

「えーと、織斑先生、それ本気で言っているんですか？」

「男が女より強かったのって、大昔の話ですよ？」

アスラン「女が男より強いのはＩＳを男が使えないからだ。つまりＩＳを使える男がいる場合どちらが強いのかは本人達の実力による。そんなことも解らないのか？」

「た、確かにそうだけど……」

セシリア「それよりも織斑先生。ハンデをつけてもらえとはどういう意味ですか！？」

千冬「そののままの意味だ、オルコット。お前では倒すどころか傷一つをつけることすら出来ない。この教室にいる中でヤマトを倒せるのは私とザラとアスカの三人だけだな。オルコット、お前がヤマトを倒すのは不可能だ」

セシリア「ハンデなどいりませんわ！わたくしが負けることなどあり得ません！」

千冬「好きにしろ。それでは勝負は一週間後の火曜日。放課後第三アリーナで行う。織り斑とヤマト、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

SIDEOUT

編入（後書き）

一「ようやく出番が来た」

箒「私の出番が全然ないんだが」

一「それは作者に言え」

作「すまん」

箒「許さん」

どすっ！←木刀で鳩尾を突く音

作「ぐはっ！」

バタリ

箒「悪は滅びた」

シ「大丈夫か作者」

ア「放っておけ」

一「それより千冬姉が言ってたけどキラってそんなに強いのか？」

箒「確かに気になるな」

ア「じゃあ実際に戦ってみるか。キラは良いか？」

キ「良いよ」

シ「一夏は？」

一「俺も良いぜ」

シ「それじゃ二人とも用意は良い？」

キ「いつでも」

一「こっちも良いぜ」

ア「それでは、始め！」

一&キ「「うおおおーーー！！」」

～模擬戦中～

～終了～

箒「速っ！」

ア「何分もった？」

シ「えっと、二分十一秒」

ア「手を抜いたか、キラ」

一「えっ、あれで！？」

シ「本気でやったら一分ももたないんじゃい？」

一「勝てる気がしない」

キ「それよりそろそろ次回予告しない？」

一「そうだな。それでは次回――」

セ「『特訓』、お楽しみにですわ」

全員「「「「「！！！」」」」」

作（よくやった、セシリア……）

誤字脱字、感想意見よろしくお願いします

特訓（前書き）

書き終わったら訓練の場面が全然ないことに気づいた

特訓

放課後

ＳＩＤＥ一夏

一夏「うう……」

俺が机の上でぐったりしているとキラ達が話しかけてきた

キラ「一夏、大丈夫？」

一夏「大丈夫じゃない。てか、意味わからん。……。何でこんなにややこしいんだ……？」

アスラン「さぁな。開発者にでも聞けば詳しく説明してくれるんじゃんじゃないか？」

シン「そりゃ無理なんじゃないの？現在行方不明中だし」

キラ「だね。一夏、先生にわからないところ聞いてくれば？」

一夏「そうだな。あ、そうだ。なあ三人とも。ＩＳの操縦教えてくれないか？」

キラ「それは良いけど、何で？」

一夏「キラとオルコットの決闘に巻き込まれたから」

そう言ってキラを睨む

キラ「うっ、ごめん」

キラは項垂れてしまった

一夏「まあ、良いけど。そういや何で俺まで決闘に参加するんだ？」

アスラン「決闘と言っても結局はクラス代表決定戦だからな。候補者が出るのは当たり前だろ」

一夏「なるほどね」

確かにクラス代表を決めるんなら候補者は全員でなきゃダメだな

シン「そう言えば一夏のＩＳはどうするの？まさか訓練用とか？」

一夏「わからん」

本当どうなんだろうな。訓練機じゃまともな勝負にもならんからな

キラ「たぶん、専用機が来るんじゃないかな」

一夏「何で？」

キラ「ＩＳは本来女性にしか使えない。なのに一夏は男であるのにＩＳを使える。となればデータをとらないはずがない」

一夏「ようは実験体ってことか」

キラ「そういうこと。まあ、データをとられるだけで、別に解剖とかされるわけじゃないんだからそれくらい良いんじゃない？」

一夏「確かにそうだな」

それに解剖とかなんて千冬姉が絶対許さないだろうし

一夏「そういやキラのＩＳはどうするんだ？」

キラ「僕は最初から専用機をもってるから。これが僕の専用機。」

そう言うとキラは蒼い翼が付いたネックレスを一夏に見せた

一夏「そうなのか。じゃあ、アスランとシンも専用気持ちなのか？」

アスラン「ああ」

シン「そうだよ」

一夏「なんかうらやましいな」

そんなことを話していると副担任である山田先生が話しかけてきた

真耶「ああ、織斑君達。まだ教室にいたんですね。よかったです」

アスラン「山田先生？」

シン「俺達に何か用ですか？」

真耶「えっとですね、寮の部屋が決まりました。」

一夏「俺達の部屋ってまだ決まってなかったと思いますけど？確か一週間は自宅から登校してもらうって話でしたけど」

真耶「そうなんですけど事情が事情なので無理矢理部屋割りを変更したんです。でも確保できた部屋が1人用が一つと二人用が一つだけなんですよ。」

アスラン「とゆうことは1人は相部屋になるってことですか？」

真耶「そう言うことのなりますね。でも1ヶ月もすれば個室の方が用意できますからそれまで我慢してください」

シン「でも女子と相部屋ってまずいんじゃ……。1人用の方に二人でってのは出来ないんですか？」

真耶「サイズ的に無理ですね」

シン「そうですか……」

即答はないんじゃないですか山田先生。少しは悩んでください

真耶「とゆうわけなので、相部屋になる人を決めてください」

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

女子との相部屋だけはなんとしても避けないと。倫理的にいろいろと問題がありすぎる。学校はなぜ止めようとしないんだ

キラ「それじゃ誰が相部屋になるかだけど、なりたい人は……いないよね、やっぱり」

三人「「「当たり前だ（ですよ）」」」

真耶「ええっ？皆さん女の子に興味ないんですか！？そ、それはそれで問題なような……」

うわぁ、この人話聞いてないよ。しかも廊下じゃ「腐女子談義」とやらが始まってるみたい

「織斑君達、男にしか興味なのかしら……？」

「それはそれで・・いいわね」

「中学時代の交友関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付けとって！」

いったい何の話をしてるんだろうね、彼女たちは

まあ、僕とアスランとシンはこの世界での過去がないから問題ないけど、一夏は大変だね、いろんな意味で

キラ「えっと、それじゃぁ、じゃんけんで負けた人が相部屋になるってことで良い？」

アスラン「問題ない」

シン「オレもそれで良いですよ」

一夏「俺もそれで構わない」

キラ「わかったそれじゃあ―――」

４人「「「「最初はグー、じゃんけん、ぽん！」」」」

キラ：パー

アスラン：パー

シン：パー

一夏：グー

キラ「相部屋になるのは一夏に決定しました」

一夏「……」

なんか一夏が真っ白になって体勢がｏｒｚになってる

とりあえず一夏にはふれない方が良いね

キラ「後は部屋を1人用か二人用のどちらかにするかだけど二人は希望ある？」

アスラン「俺はどちらでも構わないが」

シン「オレも」

そういうのが決めるとき一番困るんだけど

さてどうやって決めようか

そうしてなやんでいると

シン「くじ引きで決めませんか？」

アスラン「くじ引きか。それで良いんじゃないか？キラ」

キラ「そうだね。それじゃくじ作るからちょっと待って」

～くじ制作中～

完成。と言っても紙を三枚に切って一つに当たりと書いて並べただけだけど

キラ「当たりって書いてあるのを引いた人が1人部屋だから。それじゃあ誰から引く？」

アスラン「俺から引かせてもらおう」

アスランは右のくじを選んだ

シン「当たった？」

アスラン「いや、はずれだ」

シン「じゃあ次は俺だ」

シンは左のくじを選んだ

キラ「どう？」

シン「はずれですね」

アスラン「と言うことはキラが１人部屋だな」

キラ「だね」

シン「山田先生決まりました」

真耶「はい。えっと、織斑君が相部屋、ヤマト君が１人用、ザラ君とアスカ君が二人用ですね。それではこれが部屋の鍵です」

鍵を受け取った僕達は部屋番号を確認することにした

キラ「僕は１０２４室だね」

アスラン「俺達は１０２６室だな」

一夏「俺は１０２５室か」

ちなみに一夏はくじを引いてる途中に復活したらしい。復活するの早いね一夏

シン「そういえば荷物はどうするんですか？荷物は一回帰らないと準備できないですし、今日は帰って良いですか？」

真耶「あ、いえ、荷物なら――」

千冬「私が手配しておいた。ちなみにヤマト達の分もだ。ありがたく思え」

本当いつの間にしたんだろう。ていうかどうやって部屋に入ったんですか？

４人「「「「ありがとうございます」」」」

千冬「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

さすがにそれは大雑把すぎませんか織斑先生。もう少し何かあっても良いともうんですが

真耶「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時か

ら七時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーもありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと織斑君達は今のところ使えません」

キラ「わかりました」

一夏「何で大浴場を使えないんですか？」

シン「変態」

一夏「えっ、ちょ！？何で俺変態呼ばわりされんの！？」

アスラン「いやむしろ当たり前だと思うぞ」

一夏「だから何で！？俺はただ大浴場が使えない理由を聞いただけなのに！」

千冬「あほかお前は。まさか同年代の女子と一緒に入りたいのか？」

一夏「あー……そうだった。ここ俺達以外は女子しかいないんだっけ」

真耶「おっ、織斑君っ、女子とお風呂はいりたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

一夏「い、いや、入りたくないです」

女子とお風呂一緒に入ったりしたらどんな目に遭うか……というか死刑しかないと思うんだけど

真耶「えっと、それじゃ私達は会議があるので、これで。織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

確か、校舎から寮まで５０メートルくらいしかなかったような。どうすれば道草をくうんだろ。途中に何かあるのかな？

そういって山田先生と織り斑先生は教室から出て行った

キラ「そういえば一夏、ＩＳの特訓どうする？といっても今からじゃ時間的に無理だけど」

一夏「どうするか。内容はどんな感じするんだ？」

キラ「一夏の使うＩＳがどんなのになるかわからないからね。とりあえず基本動作をするつもりだけど。後出来れば回避行動の練習とか」

一夏「そうか。でも今からじゃ何も出来ないだろうからな。とりあえず明日からだな」

キラ「わかった。それじゃ部屋に行こうか」

そうして僕達は部屋の前で解散した

そういえばなんか一夏の部屋からすごい物音がしてたけど一夏生きてるかな？

ＳＩＤＥＯＵＴ

◇

翌日の休み時間

ＳＩＤＥ一夏

千冬「織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

一夏「へ？」

千冬「予備機がない。だからだから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

一夏「？？？」

どういうことですか？

俺がちんぷんかんぷんでいると、教室中がざわめいた。予想していたキラ達は別だが

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ～。いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなぁ」

みんな何がそんなにうらやましいんだ？

千冬「はぁ。ヤマト、簡単でいいから説明した見ろ」

キラ「あ、はい。えっと、本来ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。一夏の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として用意されることになった。これでいいですか？」

千冬「まあ、十分だろう。にしてもお前はあまり驚いていないな」

キラ「一夏に専用機が与えられるのは予想できたので」

千冬「その理由は？」

キラ「簡単に言えば国のお偉いさんや研究所の人間がこんな特異ケースを見逃すとは思

えないからです」

千冬「そうか。で、織斑は理解できたか？」

一夏「な、何となく……」

千冬「そうか。さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

真耶「は、はい！」

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

授業が終わり休み時間になるとオルコットさんが話しかけてきた

セシリア「ヤマトさんは専用機を持っていて？」

キラ「持ってるけど、それがどうかした？」

セシリア「いいえ。安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

はぁ、そうですか。

セシリア「まあ、それでも勝負は見えていますけどね。当日が楽しみですわ。」

オルコットさんはそれだけ言うと自分の席に戻っていった。何が言いたかったんだろうね

さてと次の授業の準備をしなきゃ

◇

放課後　第三アリーナ

現在僕と一夏はアリーナにて特訓中。一夏は「打鉄」を使用

キラ「訓練を始めるけど基本動作と回避訓練、どっちからやる？」

一夏「じゃあ回避訓練で」

キラ「わっかた。それじゃあ今から五回射撃をするから全部よけて」

一夏「わかった。それじゃあ始めてくれ。」

そうして訓練が始まった

◇

一発目は一夏の正面から撃った

一夏「これくらいなら！」

これは簡単によけた

キラ「気を抜いたらだめだよ一夏」

そう言いながら右足に狙いをつけ間髪入れずに二発目を撃つ

一夏「うおっと！」

これも避けるが若干体勢を崩す

キラ「これくらいで体勢を崩したらダメだよ」

胴体を狙い三発目を撃つ

一夏「うわっ！」

ギリギリのところで体勢を立て直し何とか避けるも体が硬直してしまう

キラ「休んでる暇はないよ」

再び胴体に狙いをつけ四発目を撃つのと同時にドラグーンを一機射出し一夏の頭上に待

機させ、ライフルを構えるのをやめる

一夏「うおっと！あ、危なかった。今のは当たるかと思った。？何

でライフルを構える

のをやめるんだ？まだ一発残ってるぞ？」

キラ「一夏、一つだけ忠告しておくよ。攻撃するのは僕だけだとは思わない方がいい」

一夏「はっ？それってどういう――」

――警告、上空にエネルギー反応あり

一夏「！？」

気づくのが遅かったね。今からじゃ回避はまにあわないよ

一夏「ぐおっ！」

5発目、命中

一夏「キラ、今のは卑怯じゃないか？」

キラ「卑怯じゃないよ。実際にこういう使い方もあるんだよ」

一夏「そうなのか。それにしたも今の攻撃はどうやったんだ？」

キラ「ビットって呼ばれる自立型機動兵器を使ったんだ」

一夏「そんなものまであるのか」

キラ「そうだよ。それじゃ、訓練を再開しようか」

一夏「え、もうか？」

キラ「うん」

一夏「これを一週間？」

キラ「当たり前」

一夏（キラに頼むんじゃなかったかもな）

ＳＩＤＥＯＵＴ

◇

そうして一週間は瞬く間に過ぎていき、クラス代表決定戦当日となった

特訓（後書き）

一「なぁ、キラ」

キ「なに？」

一「何で回避訓練しかやらなかったんだ？」

キ「理由は、一夏の専用機の武装がどんなものかわからないからなんだ」

一「どゆこと？」

ア「つまり一夏の専用機が射撃型なのか、格闘型なのかわからないから、ということだ」

一「なるほどな。でもやっぱ射撃訓練とかしたかったな」

シ「近接戦闘が主体の機体だったらどうするのさ」

一「うっ……」

ア「それに射撃戦闘というのも結構大変なんだぞ」

一「何で？」

キ「反動制御、弾道予測から距離の取り方、一零停止、特殊無反動旋回、弾丸の特性、大気の状態、相手武装による相互影響を含めた思考戦闘などなど。ほかにもいろいろあるよ？できる？」

一「無理」

ア「素人にはまず無理だ。さて、では次回予告を」

シ「了解。では次回、『クラス代表決定戦！』」

誤字脱字、感想意見などありましたらよろしくお願いします

クラス代表決定戦（前書き）

今回から書き方を少し変えようと思います

クラス代表決定戦

クラス代表決定戦当日　放課後

ＳＩＤＥキラ

僕と一夏とオルコットさんはカタパルトデッキで織斑先生から決定戦についての説明を受けていた

「今回はトーナメント戦で行う。まず最初にヤマトとオルコット、次に勝った方と織斑だ。ルールは制限時間は無制限、試合はどちらかのシールドエネルギーが０になるか片方が降参した時点で終了とする。何か質問はあるか？ないなら各自準備に取りかかれ」

そうしてその場は解散となった。僕はその場を離れフリーダムのじゅんびをしていると織斑先生が話しかけてきた

「ヤマト」

「何ですか織斑先生」

「なにせっかくの初陣だからな。見送りに来てやったのさ」

「はあ、ありがとうございます」

「礼はいらんさ。それとヤマト」

「何ですか？」

「少々調子付いている小娘の鼻をへし折ってやれ」

「了解」

この言葉には苦笑いするしかないね

さてとそろそろ時間だから、行くとしよう。そういえば一夏のＩＳってどんなのかな？まあ戦ってみればわかるかな。今はオルコットさんとの戦いに集中しよう

ＳＩＤＥＯＵＴ

◇

第三アリーナ　モニタールーム

ＳＩＤＥアスラン

現在俺とシンはモニタールームにいる。なぜここにいるかというと女子達により連行されたのだ。そして質問攻めにされている

「ねえねえ、ザラ君、アスカ君！ヤマト君とどういう関係なの？」

「友人だ」

「今日私達の部屋来ない？」

「行かない」

なぜか俺は全ての質問に律儀に答えていた。モニターの方を見るとアリーナの様子が映し出されておりすでにオルコットが待機して

いた。

そして数分遅れでアリーナに入ってきたキラに皆が注目した

「ヤマト君勝てるかな～？」

「オルコットさんの強さは本物だもんね～」

「でもヤマト君も代表候補生だし……」

隣ではキラとオルコット、どちらが勝つかについて討論が始まっている。もっともキラのＩＳが整備不良でも起きない限りオルコットが勝つのは不可能だ。それに俺が興味があるのは試合の結果ではなくオルコットの実力だった。最強と言うのだからそれなりの実力を持っているのだろう

そんなことを思っていると試合が始まった

先手を取ったのはセシリアだった。セシリアがスターライトＭｋ－？で攻撃するがキラはそれを避けると同時に高エネルギービームライフルで反撃する。だがセシリアも避けるが回避先を読まれ攻撃をあてられてしまう。しかもロングレンジ・ビームライフルのため直撃した部分の装甲が吹き飛んでしまった。そのことにセシリアは頭に来たのかビットを展開した。キラに射撃の嵐が襲いかかるも全て避けるか、ビームシールドで防がれていた。さらにビットをコントロールしているせいかほとんど動かないためキラの攻撃は全て命中していた

「オルコットさん……容赦ないね……」

「でもヤマト君……一回も被弾してないね……」

「しかも速い……」

試合の状況は大体予想したとうりだな。しかし、オルコットも最強と言っていたわりにはたいしたことはないな。少し買被りすぎたようだ

十分後――

周りは唖然としていた。何せ女子で唯一試験官を倒した（織斑先生に聞いた）あのオルコットがここまで追い詰められているのだから

オルコットの機体であるブルーティアーズは満身創痍だった。モニターに表示されているエネルギーの残量は底をつきかけている。ビットは全て破壊され、装甲もほとんどが吹き飛ぶか、傷ついており、無事な箇所を探す方が難しいくらいだ

対するキラの機体であるストライクフリーダムは全くの無傷であった。エネルギーの残量は七割方残っていた。そして何より一発も被弾していないのだ

素人目にも試合の結果と実力差は明らかだった

これ以上見る必要はないな。そう思い、俺は画面から目を離した

ＳＩＤＥＯＵＴ

◇

ＳＩＤＥキラ

（そろそろ終わりにしよう）

僕はライフルを腰に収納し、シュペールラケルタビームサーベルを引き抜くと同時にオルコットさんに接近する

「――かかりましたわ」

セシリアがにやりと笑うと隠していたビットを展開した。しかもこれはさっきまでのレーザー射撃をするものではなく「弾頭型」だった

「おあいにく様、ブルーティアーズは六機あってよ！」

（回避は不可能。なら――）

このタイミングでの攻撃はふつうなら避けられない。本来のストライクフリーダムの機動性なら問題ないが今はリミッターがかけられているためそれは出来ない

「破壊するまで！」

ミサイルが攻撃範囲に入るのと同時に弾頭と推進器の間を切断し破壊すると同時に一気にオルコットさんに接近しビットとスターライトＭｋ－？を破壊しとどめを刺した

『試合終了。勝者、キラ・ヤマト』

さて、次は一夏だね。一夏のＩＳどんなのかな。少し楽しみだ

『第二試合は三十分後に行う。それまでにヤマトはエネルギー補給と機体にチェックを、織斑は機体の『最適化』を出来るだけすませておけ。以上だ』

ＳＩＤＥＯＵＴ

◇

ＳＩＤＥ一夏

俺は今カタパルトデッキでＩＳの『最適化』を行っている。といってもＩＳが勝手にやってくれるので俺はただＩＳを装着しているだけなのだ。そのためやることがないからキラの試合をモニターで観戦していたのだが……正直勝てる気がしない。というか五分もしないうちに落とされるんじゃないか？俺

「負け戦だなこりゃ」

「そんな気持ちでどうするのだ一夏」

「ん？箒か。でも勝つのは無理だろ」

「無理だとしてもせめて一太刀浴びせるぐらいの気持ちでいけ」

いや～、無理でしょ。あんなに速く動かれちゃ。狙いもつけられないって

「近づけば問題ないだろ」

「箒、最後のキラの動き見てたか？ビットとライフルを破壊してとどめを刺すのにたった二秒しかかかってないぞ。逆に解体されるの

がおちだって」

「な、なら射撃武器は何かないのか？」

「さっき確認したけど射撃武器はなかった。あるのは近接ブレードが一本だけ」

（しかも名前が雪片って……）

「……せめて一撃くらいは当てろ」

「とりあえずそれが目標だな。っと、どうやら『最適化』が終わったようだな」

「試合が始まるまでに終わってよかったな」

「ああ。かなりぎりぎりだったな」

『これより第二回戦を始める。織斑とヤマトは会場に出ろ』

さてと、それじゃ行きますか

「それじゃ箒、行ってくる」

「ああ、頑張れよ」

◇

試合会場にはキラと一夏が空中で待機していた

「それが一夏のＩＳ？」

「ああ、そうだ。こいつの名前は白式だ。にしてもキラのＩＳって天使みたいだよな。それとキラ、手加減するなよ」

「まあ、装甲のある箇所はふつうのＩＳと変わらないけどね。あと手加減しないのは難しいと思うよ」

「なんでだ？」

「フリーダムにはリミッターがかかってるんだ。機体の性能が高すぎるから慣れるまでわって」

「リミッターがかかっててあの機動力かよ……」

どんだけ機動力高いんだ

「本来の機動力なら最後のミサイルも避けられたんだけどね。それにリミッターが付いてるのはそれだけじゃないんだ。エンジンの出力と武器の威力、あと装甲の強度にもリミッターがついてるんだ」

うわー、なにそのリミッターのオンパレード。俺なら絶対にいやだね

「まあ、ＩＳにも慣れたし、この試合が終わったら解除してくれるからね」

「キラに付いてるってことは、アスランとシンのＩＳにも付いてるのか？」

「うん」

『二人ともお喋りはそこまでにしておけ』

「「すみません」」

『まったく。それでは両者用意はいいか？……では、始めっ！』

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

一夏は合図と共に近接ブレードを呼び出し接近……って近接ブレード？

「一夏正気？」

「仕方がないだろ！これしか装備ないんだから！」

うわー、ある意味すごいね。格闘装備しかないなんて

（何か特殊な能力でもあるのかな？でも近づけさせなければ問題は無いかね。わざわざ

相手の土俵で戦う理由もないし）

牽制にライフルを撃つ

「そのくらい！」

一夏は当然避けるが、再び行動するまで若干タイムラグがあった

（避けるのはいいけど止まったら意味無いのに）

当然その隙を見逃さずに撃ったクスィフィアス３レール砲が白式に直撃した

「うおっ！でもこの程度！」

「まだまだ序の口だよ」

そういてスーパードラグーンを全機展開しオールレンジ攻撃を仕掛ける

「八機でオールレンジってむちゃくちゃだろ！？」

「しかもドラグーンが出来るのは射撃だけじゃないよ」

二機のドラグーンにビームソードを展開させ突撃させる

「うおおっ！？あ、危なかった……」

あ、避けた。これは当たると思ったんだけど。でも――

（一夏、ドラグーンばかりに気を取られちゃダメだよ）

キラはカリドゥス複相ビーム砲を一夏に撃つ

「しまっ！？」

ドラグーンに気を取られていた一夏は回避が出来ず直撃してしまった

（今のでかなりシールドエネルギーは削れたはず。そうなれば一夏はきっと一気に勝負を決めようとするはず）

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥ一夏

正直に言おう。かなりピンチだ

（シールドエネルギーの残量は１２０。キラに勝つのは無理だ。なら瞬間加速で一気に近づいて一撃入れる！）

そうと決まれば――

「行くぞっ！」

瞬間加速でキラに突撃する

「おおおっ！」

手の中でエネルギーが増していき、雪片の刀身が光を帯びてゆく

「これで！」

キラの懐に飛び込んだ俺は上段から下段への袈裟払いを放つ

――が、その斬撃は空を切るだけだった

（えっ？）

「残念だったね一夏」

俺が左の方を見るとそこにはライフルを構えるキラがいた

（やっぱ強いなキラは）

そうしてキラはライフルの引き金を引いた

『試合終了。勝者、キラ・ヤマト』

こうしてクラス代表決定戦は幕を閉じた

◇

翌日　ＳＨＲ

あり得ないことが起きた

「では、一年一組代表は織斑一夏君、副代表はキラ・ヤマト君に決定です」

あれー、俺キラに負けたはずなのに何で？そしてキラは何故平気そうな顔をしているんだ！

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合で負けたんですが、何でクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは――」

「それはわたくしと〝キラさん〟が辞退したからですわ！」

先週あんなに代表にふさわしいのは自分だって言ってたのにどうしたんだ？

「キラ、何で？」

「僕が辞退した理由は一夏が弱いから。ＩＳの操縦には実戦が一番の経験だからね。代表になれば戦いには事欠かないしね。オｒ「セシリアで構いませんわ。それとさん付けもいりませんわ。辞退した理由はキラさんと一緒で一夏さんのためですわ」だそうだよ」

ほほう、なんというありがた迷惑。それとキラ、お前からしたらほとんどの奴が弱いだろ。――ん？あれ？今俺とキラのこと名前で呼んだ？

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私達は貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑君達は」

「お前らクラスメイトを売るなよ」

おお、今のつっこみはシンか

「それでですね」

ん？なんだ？

「わたくしとキラさんのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、みるみるうちに成長を遂げ――」

バン！机を叩く音が響く。立ち上がったのは箒だった

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が直接頼まれたからな」

ちょっと待て箒。俺は頼んだ覚えはないぞ。しかも何でそんなに異様に殺気だった瞳でセシリアを睨んでるんだ？

「ご安心を箒さん。わたくしが狙ってるのは一夏さんではありませんから」

そう言ってセシリアはキラをちらりと見る

それを見た箒は

「そうか。ならいい」

（っていいのかよ！？）

何だ、いきなり箒の殺気が消えたぞ。なにをしたんだセシリアは？

（女子の思考って本当よくわかんないな）

そんなことを思っていると千冬姉が前へ出てきた

「クラス代表は織斑一夏、副代表はキラ・ヤマト。依存はないな」

はーい、と女子の皆さんはクラス一丸となって返事をした。団結はいいんんだけど俺にとってもいいことであったらなと、心から思う

クラス代表決定戦（後書き）

作「何とか出来た……」

キ「お疲れ様」

シ「俺の出番が全然無い……」

ア「仕方あるまい。今回の主役はキラと一夏、セシリアだからな」

シ「だけど！」

ア「それに俺だってセリフの量はお前と同じくらいだ」

シ「あ、ゴメン」

ア「いや、わかればいい」

作「なんか変な友情が芽生えてる」

キ「気にしたら負けだよ。そういえば感想にもあったけどアスランとシンは誰とくっつけるの？」

作「セシリアはキラにフラグが立ったけどね。他はまだ考え中」

キ「そうなんだ。それじゃ一夏次回予告よろしく」

一「了解。それでは次回『転校生』」

作「それでは次回のお楽しみ」

誤字脱字、感想意見などありましたらよろしくお願いします

転校生

ＳＩＤＥ一夏

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実戦してもらう。まずは織斑、オルコットから
だ。試しに飛んでみせろ」

四月も下旬、遅咲きに桜の花びらがちょうど全部無くなった頃。俺達は今日もこうしておにＫ――ではなく、千冬姉のの授業を真面目に受けていた

「速くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

せかされて意識を集中する

ＩＳはフィッティングしたらずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。ちなみに俺は右腕のガントレット。……いや、普通はアクセサリーらしいんだが俺のは完全に防具だ。何でだ？男だからか？だったら何故キラ達はアクセサリーなんだ？

「集中しろ」

いかん、次は叩かれる。ちなみに出席簿アタックの威力はＩＳのシールドエネルギーをわずかだが削るくらいある。ほんとに人間か、俺の姉は？

まあ、そんなことを思っている内に白式が展開が終わる。時間は０，７秒。これでも練習したんだが

「よし飛べ」

言われて、セシリアの行動は速かった。急上昇し地上から五十メートルとるくらいのところで静止する

俺も遅れて後に続くが、その上昇速度はセシリアよりかなり遅いものだった

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

早速通信回線からおしかりの言葉を受けるちなみに急上昇急下降は昨日習ったばっかりだ。『自分の前方に角錐を展開するイメージ』で行うらしいが何となく感覚がつかめない。ちなみにキラとアスラン、シンは当然のように出来ていた。……何であんなにうまく飛べるんだ？

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもな。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだこれ？」

「説明しても構いませんが、夜までかかりますわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明しなくていい」

すぐさま断る。絶対俺の頭では理解できない

「そうですか。そういえば訓練の方はどうなっていますの？」
「今はキラが操縦と回避、箒が剣術、アスランとシンが近接戦闘をそれぞれ担当してる」
「そうなのですか。大変ですわね」
「ああ。おまけにかなり厳しいからな」
「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」
いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。見ると、地上では山田先生がインカムを箒に奪われていた
（何で誰も止めなかったんだ？）
「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」
「了解です。では一夏さん、お先に」
言って、すぐさま地上に向かう。ぐんぐんと小さくなっていく姿を、俺はちょっと感心しながら眺めた
「うまいもんだなぁ」
そしてどうやら完全停止も難なくクリアーしたようだ――よし、俺も行くか
ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥシン

授業では一夏とセシリアが急下降と完全停止を実演している。結果はセシリアは難なくクリアー。まあ代表候補生からすればこんなこと朝飯前だろう。そして一夏は……グラウンドにクレーターを作っていた。なにやってんだかな

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グランドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

「次はヤマト、ザラ、アスカだ。内容は先ほどと同じだ。ただし完全停止の目標は地表から一センチだ」

「「「了解」」」

そして順番に急上昇していき、地上から五十メートルのところで静止する

「誰から行く？」

「俺が行こう」

最初はアスランだ。ジャスティスの姿がどんどん小さくなっていく。どうやらクリアーしたらしい

「次は僕が行くよ」

そしてキラさんも行く。結果は当然クリアー

「最後はオレか」

急降下で地表へと接近し完全停止をを行う。結果は当然クリアーだ

さて次は何かな？

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめろ」

そう言われて、一夏は横を向き、正面に人がいないことを確認すると右腕を突き出し左手で握った。少しすると雪片弐型が展開された

「遅い。０，５秒で出せるようになれ」

織斑先生にそう言われた一夏は軽く凹んでいた

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。そして一瞬光っただけ。それだけで狙撃銃《スターライトｍｋ？》が握られていた。しかもすでにマガジンが接続されていて、セシリアが視線を向けるだけでセーフティが解除される。一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。ちなみに横に向けられた銃口の先には僕がいた

「さすがだな、代表候補生――ただし、そのポーズはやめろ。ヤマトを撃つ気か」

「えっ？あっ！ご、ごめんなさいキラさん！」

「僕は気にしてないから、謝らなくていいよ」

「まったく。これからは正面に展開できるようにしろ」

「は、はい」

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

そう言われて一夏は僕達に視線で手伝ってくれと頼んでくるが

「ゴメンね。織斑先生に手伝うなって言われてるから」

「まあ、自業自得だな」

「頑張れ」

発言順は僕、アスラン、シン。頑張ってね一夏。心の中で応援してるよ

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥ一夏

放課後　食堂

「というわけでっ！織斑君クラス代表、ヤマト君副代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

ぱん、ぱんぱーん。クラッカーが乱射される。俺の頭に乗ってきた紙テープは、その実質重量よりもはるかに重く俺の心にのしかかっていた

ちなみに俺の隣に座っているキラは結構平気そうにしている

「……なぁ、キラ。何でお前は平気でいられるんだ？」

「もっと責任のあることをやったことがあるから、あまり動じないんだよ」

「もっと責任のあることねぇ。どんなの？」

「一般市民を核ミサイルの大群から守るとか。ちなみに一発でも通

したらアウト」
「そりゃまた、なんというか……すごいな」
そりゃどんな奴でも動じなくなるよ。俺は絶対やりたくないけど
そんなことを話していると
「それではただいまよりザラ君から織斑君へ記念品が贈呈されます」
「何の記念だよ」
「分かり切ってることを聞くなシン」
「まあそうだけど。てかアスラン、記念品ってアレ？」
「そうだ。時間もなかったからな。仕方あるまい」
そう言ってアスランは俺に箱を渡してくる
「ありがとな、アスラン」
「気にするな。元々クラスの奴に頼まれたから用意しただけだ」
「そうなのか。箱開けていいか？」
「ああ」
とりあえずアスランから許可が出たので箱を開ける。そこに入っていたのは白くて丸いものだった

「なんだこれ？ボール？」

でもよく見てみると線が入ってるところもあるな。なんだこれ？

「アスランこれってハロだよね？」

「ああ、そうだ。暇なときに作っていたんだ」

「でも白ハロなんていたっけ？」

「白式の色が白だからな。新しく作ってみた」

キラ達が話してることがよくわからん。なら聞くのが一番だな

「なぁ、ハロってなに？」

「簡単に言えば、ボール型ロボットかな？」

「ロボット？こいつが？」

とても信じられずそのハロを見ていると

『ハロ、ハロ。ゲンキカ、ゲンキカイチカ』

「うおっ！？しゃべった！？」

「か、可愛い……」

「いいなぁ～、織斑君」

「私も欲しいかも……」

どうやらハロは女子に大絶賛のようだ

「こいつにはＡＩが搭載されているから多少の会話なら可能だ」

「へ～。そうなのかハロ？」

『ハロ、ハロ。ソウダ、ソウダ』

「すごいな。こんなにすごいのホントに貰っていいのか、アスラン」

「ああ。かまわない」

「でもアスラン。よく千冬姉が許可したな」

「そのことか。キラ説明頼む」

「何で、僕？」

「発案したのがキラさんだからでしょ」

「そういえばそうだったね」

「で、結局どうやったんだ？」

「完成したハロ一体プレゼントした」

「買収！？」

千冬姉が？あの常時厳戒態勢のあの人が買収された！？

「しかも結構気に入ってたみたいだし」

うわー、何か千冬姉のイメージが音を立てて崩れてく……

「まあ、ハロは大事にしてくれ」

「それはまかせろ」

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生達、織斑一夏君、キラ・ヤマト君に特別インタビューをしに来ました～！」

オーと一同盛り上がる。オーじゃねえよ。オーじゃ

「だってよキラ。っていない！？」

よく見るとアスランとシンまでいない。あいつら逃げやがった……

「ちっ、まあいいわ。後で捕まえれば問題ないし」

捕まえるって、あんたなにする気だよ……

こうしてパーティーは十時過ぎまで続いた。女子のエネルギー量って恐ろしいな

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥアスラン

「ザラ君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝。席に着くなりクラスメイトに話しかけらた。俺やキラ、シンは恋人がいたから最初から女子ともそれなりに話せたが一夏は最初の頃は全然ダメだったな。現在は話せるようになってきているようだ

「いや、聞いたこと無いな。キラとシンはどうだ？」

「俺はないよ」

「僕もないね。でも転校生って今の時期に？」

たしかＩＳ学園の転入するための条件はかなり厳しい。しかも国の推薦がなければ無理。ということはつまり――――

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

やっぱりか。そういえば代表候補生といえば

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。今朝もまた、腰に手を当てたポーズで登場。何故ここまで似合うのか本当に不思議だ

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

さっきまで自分の席にいた箒がいつの間にか輪に加わっていたさ

すがの箒も女子、噂には敏感ということか
「どんなやつなんだろうな」
「気になるのか？」
「ん？ああ、少しは」
「ふん……」
一夏が正直に応えたら箒がすねてしまった
（鈍感なのもここまで来ると呪いだな）
見るとキラとシンもため息をついていた
「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるという
のに」
「まあ、やれるだけやってみるけど。それにキラだっているし」
「僕を頼られても困るんだけど」
「一夏、そんなんじゃ、勝てる試合も勝てなくなるぞ」
「そうだぞ。男たるものそんな弱気でどうする」
「織斑君とヤマト君が勝つとみんなが幸せだよー」

「それに今のところ専用機持ってるクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

転校生が専用機持ちという可能性もあるがな

「――――その情報、古いよ」

入り口の所に誰か立っているな。誰だ？

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

いや、キラが出る時点でかなり簡単だが

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好つけてるんだ？すげぇ似合わないぞ」

「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

「おい」

「なによ！？」

「ＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「は、はい！」

そう言ってダッシュで教室に戻っていく中国代表候補生

（中国代用候補生凰鈴音か。また賑やかになりそうだな）

俺はそんなことを思いながら自分の席に着いた

ＳＩＤＥＯＵＴ

転校生（後書き）

鈴「あたしの出番少なくない！？」

箒「というか女性陣全体の出番が少なくないか？」

セ「どういうことですか？」

作「質問するのは構わないからまずＩＳを展開するのをやめてください。理由は解らない。書いてたらこうなった」

鈴「判決、死刑」

箒＆セ「「異議なし」」

作「ちょ、まっ！？ぎゃあああああああああ！！！！」

キ「あーあ」

ア「ある意味自業自得だな」

シ「えーと、次回は……タイトル未定？」

一「それでは次回また会おうぜ」

誤字脱字、感想意見よろしくお願いします

クラス対抗戦（前書き）

アスランと鈴をくっつけるのが無理矢理過ぎる……

おまけにタイトルのわりにバトルシーンが少ない……

クラス対抗戦

学食

ＳＩＤＥ一夏

現在俺はキラ、アスラン、シン、箒、セシリアと一緒に学食へ向かっている

「なぁ、一夏」

「なんだ箒」

「朝現れた奴とは一体どういう関係なんだ？」

「もしかして付き合ってるとか？」

おいシン、そう言うことを箒の前で言うな

「な！？そ、そうなのか一夏！？」

「いや、あり得ないだろ」

「何でだアスラン」

「一夏が気づくとは思えない」

その言葉にうなずく一同。なんか馬鹿にされているような気がする

「まあ、その話はメシ食いながら聞くから」
「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」
そんなことを話してる内に食堂に到着した
ＳＩＤＥＯＵＴ
ＳＩＤＥシン
学食に到着するとそこには―――
「待ってたわよ、一夏！」
なぜか凰がオレ達の前に立ちふさがっていた
「とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」
「う、うるさいわね。わかってるわよ」
ちなみにその手にはお盆を持っていて、ラーメンが鎮座している
「のびるぞ」
「わ、わかってるわよ！大体、あんたを待ってたんでしょうが！何で早く来ないのよ！」
（ここで待つより教室で合流した方がいいんじゃないか？）

とりあえず俺達は食券をおばちゃんに渡し、出来た料理を受け取り空いてる席に座る

「そういやその三人は誰？」

「ああ、紹介がまだだったな。俺の隣からキラ、シン、アスランだ」

「僕はキラ・ヤマト。よろしくね」

「オレはシン・アスカ。よろしく」

「俺はアスラン・ザラ。よろしく頼む」

「あたしは凰鈴音。中国代表候補生よ。あと呼び方は一夏と同じ鈴でいいわよ」

「「「わかった」」」

とりあえず自己紹介はこれで終わり

「ちなみに三人も代表候補生なんだぜ」

「ふ～ん。まあ他の国とか興味ないけど。でも代表候補生ってことはＩＳ使えるのよね。だけどニュースには一夏しか出てきてなかったわよ。何で？」

さすがに異世界から来たなんて答えられない。まあ答えたところで信じないともうけど

「まあ、いろいろあってね。機密事項なんだ」

「そうなんだ。へんなの」

（へんなのって……。しょうがないじゃん俺達元々この世界にいなかったんだから！）

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

「まあ、確かにお二人の関係には興味ありますわね」

疎外感を感じてか箒が棘のある声で聞いてくる。まあ自分の片思いの相手が他の女子と仲良く話してるというのもあるのだろうが。一方のセシリアは普通。まあ狙ってるのはキラだし

「ただの幼なじみだ」

「……」

「？　何で睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

ここでも相変わらずの鈍感スキルを発動させる一夏。時々こいつに恋愛感情はないのではと思う

「ンンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの！？」

「うん。さっきも言ったけどあたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ！？」

「あ～、セシリア落ち着いて」

キラさんが落ち着かせようとしても効果なし。よほど頭に来ているようだ

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしがかつよ。悪いけどあたし強いもん。もちろんそこの三人にもね」

（鈴は今まで一度も負けたことがないんだろな。だから素でこういうことが言えるんだろうな）

「いや無理だろ」

「……何でよ一夏」

「前に織斑先生にキラとアスランとシンがどのくらい強いか聞いたことがあるんだ」

「それで？」

「返答が『あいつらの実力は最低でも私の全盛期より上だ。今の私では一対一で本気を出しても勝てないだろうな。それと相手があいつらのうち1人の場合倒すとしたら国家代表クラスの奴同士で組んだタッグが最低でも二組。二人なら六組。三人の場合は倒すのは不可能だ』だと」

「……マジ？」

「ああ。あの人が嘘を言うと思うか？」

「たしかに」

「あのさぁ」

「どうしたシン」

「そろそろチャイム鳴るけどいいのか？」

「「「「！？」」」」

それを聞いた四人は一斉に時計を見て時間を確認する

「後五分……」

一夏が絶望的な雰囲気でつぶやく。なぜなら一夏達はまだ少しとはいえ料理が残っているのだ。それを食べていては完全に遅れる。かといって残すことは許されない。つまり、遅刻&鬼の制裁決定

「それじゃあ一夏」

「俺達は先に行くぞ」

「ま、がんばれ」

そう言い残し俺達は学食からダッシュで教室に向かう。後ろから一夏が何か叫んでたけどそこは無視することにした

結果は当然のように、一夏達は授業に遅刻した

SIDEOUT

◇

SIDEキラ

「最っっっ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

部屋で読書をしていたらいきなり一夏と箒の部屋から鈴の怒鳴り声が響いてきた。今度は何をやったの一夏……

（一応アスランに知らせておこう。その前に一夏達から理由を聞い

ておかなきゃ）

そうして一夏から理由を聞いた後、アスランとシンの部屋に向かった

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥアスラン

キラが俺達の部屋に来た。理由は先ほどの鈴の怒鳴り声だろうな

「キラさん、何があったんですか？」

「それを今から説明するところだから」

◇

「――というわけなんだよ」

簡単に言えば一夏が昔鈴とした約束を忘れてしまい、さらに間違って覚えていたというおまけ付き

（近いうちに一夏に女心について教えておく必要があるかもな。そのときはセシリア当たりにでも頼むか）

「なんかもう、呆れますね」

「うん。というわけでアスラン」

「鈴の相談にのってやれと言うんだろ」

「戦争が終わってからオーブにいたときにも恋愛相談受けてたでしょ」

「確かにそうだが、俺の所に来る奴は相談じゃなくて愚痴をこぼしに来ているようなものだろ」

「でもちゃんとアドバイスしてるんでしょ？」

「なら大丈夫だろ」

「だがなシン、こういうことは本人達の問題であって第三者が首を突っ込んでいい話じゃないだろ」

「でもこのまま進んで関係が修復不能になるよりはいいんじゃない？」

確かにキラの言うことも一理ある。修復不能になるくらいなら俺が首を突っ込んで仲直りさせる方が何倍もいいだろう

「わかった。出来るだけやってみよう」

そう言って俺は鈴を探しに部屋を出た

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥシン

アスランは鈴を探しに。俺とキラさんはそのまま部屋に残っている。でもアスランが恋愛相談受けてたのは以外だな。にしてもキラ

さんは何でさっきからそわそわして落ち着きがないんだろ？

「アスラン大丈夫かな……」

「何でですか？」

「ちょっと気になることがあるんだ」

「気になることですか？」

「うん。オーブにいたときにも今回と似たようなケースが幾つかあってね。相談した女性隊員の人たちは何故かアスランに惚れちゃうんだよ」

「一目惚れとかじゃなくて？」

「ならまだ良かったんだけどね。でも似たようなことを相談した人達は全員心から愛してますって感じだったからね」

「なんで？」

「そういう遺伝子でも持ってるんじゃないの？」

す、すごい投げやりなコメント……

「おまけに休暇にオーブ行けばアスランのことすごい聞かれるから全然休めないし、そのことを知ったラクスにすごい良い笑顔で怒られる。そのエンドレスだよ」

うわー、すごいストレスたまりそう。てか、ラクスさんも嫉妬と

かするんだ。名君といえど1人の女性だってことか

「まあストレスはアスランとの模擬戦やって発散するんだけどね」

（この場合アスランは自業自得ってことになるのか？てゆうかそろそろ話題を変えたよう。じゃないと愚痴を聞く羽目になるし、キラさんが壊れかけてる）

「と、とりあえずこのままアスランが戻ってくるのを待ちます？」

「うん、そうだね」

（良かった。何がかは解らないけど良かった）

２０分後――

アスランが大きなため息をつきながら戻ってきた。それを見たキラさんの反応はただ呆れているようだった

「アスラン、もしかして」

「ああ。やってしまった」

「つまり、鈴がアスランのことを好きになったってこと？」

「「そういうこと」」

「どうすんのさ」

「どうするも何も過ぎてしまったことはどうしようもないからな」

「そうだね。そのことに関してはまた今度話すとしようよ。今日はもう遅いから解散しようか」

「ああ」

「はい」

こうして今回の騒動は幕を閉じた

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥ一夏

五月

あれから数週間がたった。ちなみに鈴の機嫌は何故か良い。あれほど怒らせたにもだ。そしてアスランにやたらと絡んでいる。でも俺と廊下や学食で会うと露骨に顔を背けられる。このことをキラ達に相談したところ全員一致で『一夏が悪い』だった。なぜだ？

現在俺達は訓練をするため第三アリーナに向かっている

「一夏、来週からクラス対抗戦だから訓練の時間を少し減らすよ」

「なんでだ？」

「本番の時に万全の状態じゃないとな」

「たしかにそうだな」

本番当日の時まで疲れが残ってたら思うように動けないからな

「まあその分密度を上げるつもりだけどね」

「今日はキラさんでしたわね。内容はどんな感じするのですか？」

「回避訓練だから、弾幕鬼ごっこかな」

「あ、あれをやるのかキラ？」

「ほ、本気ですかキラさん」

あれ、何故か弾幕鬼ごっこと聞いたとたん箒とセシリアが震えだした。そんなに恐いものなのか？

「そういえばやったことあるのは箒とセシリアだけだったね。内容は僕の攻撃から一定時間逃げるだけだよ」

そこまで怖がるような内容でもないよな

「そんなに恐いのか？」

「あれはもう恐いなんて次元じゃない……」

「途中で泣きそうになってしまいましたわ……」

代表候補生が泣きそうになるってどんだけハードなんだ……。でもただ避ければ良いだけなんだから平気だろ

そんなことを話している内にアリーナに到着

「待ってたわよ、一夏！」

ビットには鈴がいた。昨日まで俺のことを避けまくっていたのにどういう心境の変化だろうか。後ろで箒が顔をしかめる気配がするがとりあえず放置しよう。触らぬ神に祟りなしだ

「貴様、ここにどうやって入った！ここは立ち入り禁止だぞ！」

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいな……」

うわ、箒のぴくぴくと引きつった口元が非常に恐ろしい。この静かに怒るっていうのは何故か俺が悪くなくてもプレッシャーがすごい。なのにキラ達は何故そんなに平気そうな顔でいられるんだ！？

「そもそも今日は一夏に言いたいことがあったから来たのよ」

「言いたいこと？」

「そうよ。一夏、前にあたしがあのときの約束を覚えてるか聞いたことあるでしょ。その約束はもう思い出さなくても良いわ」

「なんでだ？」

「あの約束の意味が無くなったからよ。まあ、これからは幼なじみとして付き合ってあげる。それじゃあね」

そう言うと鈴はビットから出て行った。どうしたんだ鈴のヤツ？

「一夏、そろそろ始めるよ」

「ああ、わかった」

とりあえず、今は訓練に集中しよう

ＳＩＤＥＯＵＴ

◇

ＳＩＤＥキラ

試合当日、第２アリーナ第一試合。組み合わせは一組と二組

事前の話し合いで一夏は鈴の、僕は副代表の子を相手することになった

（一夏も強くなったとはいえ、経験では鈴の方が上だね。なら相手には悪いけど早々に退場して貰って一夏の援護に向かった方が良いかな）

『それでは、試合を開始してください』

鳴り響くブザーが切れる瞬間ドラグーン自分の周りに展開する

――――マルチロックオン完了、ドラグーンフルバースト

「当たれぇぇ！」

「え？」

ストライクフリーダムと八機のドラグーンから発射されたビームは反応することすら出来なかった二組の副代表が操る打鉄に直撃した

『二組副代表、シールドエネルギー〇』

（それじゃ一夏の援護をしよう）

ビームライフルを連結し、ロングレンジライフルで鈴に狙いをつけ引き金を引こうとした瞬間――――

ズドオオオンッ！！！

何かがアリーナのシールド突き破って侵入してきた

ＳＩＤＥＯＵＴ

クラス対抗戦（後書き）

今回は読者の皆様にアンケートをお願いしたいと思います

内容は次回の敵ＩＳをモビルスーツにするとしたら何が良いか、というものです。

なお、ＭＳであれば連合、ザフト、量産型、ガンダムタイプは問いません。なお作品はＳＥＥＤまたはＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙのなからお願いします。小説に出す敵の数は三機くらいにしようかと思ってます。

受付は二月三十日までです

それではアンケートご協力お願いします

乱入者（前書き）

まずはお礼を

それ散る様、コアス様、シン様、ライス様、水麗様、唄鯨様、Ｒａｉｎ様、蒼騎龍様、ヴァルキュリア様

アンケートにご協力ありがとうございました

それではどうぞ

乱入者

ＳＩＤＥ一夏

キラが二組の副代表を倒した瞬間突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った

「な、何だ？何は起こって……」

状況が解らず混乱する俺にキラと鈴からプライベートチャンネルが飛んできた

『一夏、試合は中止だ！』

『すぐにピットに戻って！』

「は？何を言って――」

るんだ？そう言おうとした瞬間、ＩＳのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた

――ステージ中央に熱源。数は三。所属不明のＩＳと断定。ロックされています

「なっ――」

緊急通告が行われた次の瞬間、九発のビームが俺に向かってくるがぎりぎりのところで回避に成功する

「あ、危なかった……。訓練受けておいて正解だったな……」

煙の方を見ると先ほどのビームを放ったＩＳが現れた

「手にビームランス、両肩にはシールドか。しかもシールドの先端になんか付いてるし。絶対なんかあるなあのシールド。おまけに『全身装甲』かよ。面倒なことこのうえないな。それでもやるしかないか」

そうして俺は敵ＩＳに突撃していた

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥ鈴

視界の端に一夏が煙から出てきた敵ＩＳに突撃していくのが見えた

「ああ、もう！しょうがないわね！」

一夏の援護をするために近づこうとするが、遮るように三発のビームが通り過ぎていった

「誰！？」

ビームが来た方を向くと右手にバズーカを持ち、左手にビーム砲が付いたシールドを持ちバックパックに二門のビーム砲が付いたＩＳがいた

「（さっきの攻撃はあいつからのね。にしてもこいつも一夏が戦ってるのと同じ『全身装甲』。おまけにさっきのは攻撃はかなりの威

力があった。あれだけはくらわないようにしないと）……あたしの相手はアンタってことね。上等よ、すぐにスクラップにしてあげる！」

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

僕は一夏達が戦っているＩＳを見て呆然としていた

（あれは間違いなくカラミティとアビスだ。でも何であの機体がこっちの世界にあるんだ？まさか僕達以外にもＣ．Ｅ．から来た人がいる？でもあの二機のデータを持っているとすると有力候補は連合側の人間ってことになるけど。それに開発のための資金や設備はどこで手に入れたのかがわからない）

――敵ＩＳに生体反応なし。無人機と断定

（無人機！？でもＩＳは操縦者がいないと動かないはず……考えてもしょうがない。今は一夏と鈴の援護に集中しよう）

一夏達の所へ向かおうとすると、全身が銀色のＩＳがビームサーベルで斬りかかってきた

それをビームサーベルで防ぎ、攻撃してきたＩＳを見て僕は目を見開いた

（なっ！どうしてこの機体が、プロヴィデンスがあるんだ！？あれはジェネシスの攻撃で消滅したはずなのに！）

そんなことを考えながらプロヴィデンスと斬り合いをしていると一夏からオープンチャンネルで通信が入ってきた

「キラ、こっちの援護は出来ないか？」

「無理だ！こっちも手一杯だ！今はアスランとシンが来るのを待つしかない！」

「わかった。悪いな、無理を言って」

「気にしないで。それと気をつけてね」

「ああ。そっちもな」

そうして通信を終わる

いま僕とプロヴィデンスは戦っていなかった。もちろんどちらかが墜ちたわけでもない。なぜなら一夏から通信が来たとたんプロヴィデンスが離れたのだ

（何故攻撃してこない。通信の間は会話に注意が若干向いてるから倒すチャンスだったはずなのに。……いや、とりあえず今はあれを早く倒すことだけを考えよう）

今度は互いにドラグーンを展開しライフルでの撃ち合いを始めた

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥアスラン

俺とシン、箒とセシリアは織斑先生のいるピットに来ていた。すでに一夏や鈴、キラが敵と交戦してから十分が経過していた

「織斑先生！」

「ザラか、どうした」

「俺とシンにＩＳの使用許可を！」

「そうしたいところだが――これを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。その数値はこの第２アリーナのステータスチェックだった

「遮断シールドがレベル４に設定……」

「しかも扉が全てロックされている――あいつらの仕業かよ！」

「そのようだ。アスカ、デスティニーでシールドを破れないか？」

「さすがにここまで強度が高いとリミッターを解除しても無理だと思います」

「そうか」

「アスランとシンのＩＳにはリミッターが付いているのか？」

箒が質問してきた

（そういえば箒は知らないんだったな）

「確かに付いているが武器の威力とエンジンの出力と装甲の三つだけだがな。それに解除するには教員の許可がいる」

「そうなのか」

隣ではセシリアと織斑先生が話し合っていた

「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を――」

「やっている。現在も三年がシステムクラックを実行中だ。……後二分で解除できるとのことだ。ザラ、アスカいけるか？」

「問題ありません」

「それにオレ達はあいつらと交戦したこともあります」

「そうか、ではお前達に任せるぞ。それとその話は後で聞かせて貰う。織斑！凰！聞こえるか！」

織斑先生は一夏と鈴にオープンチャンネルを開く。プライベートチャンネルではないのは一夏が開き方を知らないからだ

「何ですか、織斑先生」

最初に応答したのは鈴だった

「今から二分後に遮断シールドが解除される。そしたらお前達は下がれ」

「でも俺と鈴が相手をしているやつはどうするんですか？」

一夏が続いて応答してくる

「それについてはザラとアスカが相手をするから問題ない」

「「了解」」

「さて後一分三十秒だ、用意は良いか？ザラ、アスカ」

「「はい」」

「それとリミッター解除の許可を出しておく。ヤマトにも伝えろ」

「わかりました」

「いいんですか？織斑先生」

山田先生が質問してきた

「今は緊急事態ですから已むを得ません」

「確かにそうですけど」

山田先生と織斑先生が何か話しているが今の内にキラに伝えておこう

『キラ聞こえるか？』

『何、アスラン』

『織斑先生からリミッター解除の許可が出た』
『わかった。それとアスラン』
『何だ』
『敵のＩＳだけど生命反応がないんだ』
『無人機ということか』
『うん。間違いなくね』
『わかった。それならこちらも遠慮する必要はないな』
『うん。それじゃ切るね』
『ああ。教えてくれ助かる』
『それじゃ』
キラと情報のやりとりを終えると遮断シールドが解除されるまで後三十秒ほど残っていた
「シン、俺はカラミティの相手をするからアビスの方は任せたぞ」
「わかった」
「それと敵は無人機とのことだ」

「無人機か……。それなら遠慮無くやれるな」
「そういうことだ」
「なぁ、アスラン」
「なんだシン」
「久々に出撃するときのあれやってみないか？」
「そうだな。やってみるか」
三十秒経過したため遮断シールド解除されたようだ
「それじゃあ行くかシン」
「ああ！」
そうして二人はカタパルトに乗りフェイズシフト装甲を展開する
「アスラン・ザラ、ジャスティス出る！」
まずは俺が射出された
「シン・アスカ、デスティニー行きます！」
続いてシンが射出され、俺とシンは戦場へと向かった
ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥシン

アビスはビームランスで、一夏は雪片弐型で斬り合っていた

（まずは一夏とアビスを離さないと）

牽制としてライフルを三発撃った

それに気づいたアビスは避けるために一夏から離れるとすかさずオレはその間に入る

「ずいぶんボロボロだな一夏」

「うるさい。でも助かったぜ。シールドエネルギーもそろそろやばかったし」

「むやみやたらと突っ込むからだよ」

「うっ」

「まあ、あいつの相手はオレに任せて一夏は下がれ」

「ああ、そうさせて貰う。悪いな」

「じゃあ今度ジュースでもおごってくれよ」

「わかったよ。ちゃんと戻って来いよ」

「ああ」

一夏はビットに下がっていった

オレはアビスを睨みながら言い放った

「さてと、仲間を傷つけた代償はでかいぜ、アビス」

両者はしばらく睨み合ったまま動かなかったが、突然アビスが三連ビーム砲、カリドゥス複相ビーム砲、バラエーナ改二連装ビーム砲を同時に撃ってくる

「当たるかよ、そんな攻撃！」

シンは避けると同時に高エネルギー長射程ビーム砲を撃つ

アビスは攻撃後の硬直で避けるタイミングを逃したため肩のシールドで防ぐが威力が高かったため体勢を崩してしまった

（いまだ！）

シンはこの好機を逃さずアロンダイトを引き抜くと瞬時加速で一気に近づき大上段から振り下ろすがアビスはギリギリのところでビームランスで防いだ

「まだまだぁ！」

アロンダイトを受け止めたビームランスをサマーソルトで蹴り上げ、アロンダイトでアビスの両腕を切断すると頭部を左手で掴みパルマフィオキーナ掌部ビーム砲で破壊した

――敵ＩＳの機能停止を確認

「よし。キラさんとアスランの方はどうなったかな」

（にしても、ずいぶん弱かったな、そのおかげで楽だったけど。まあエクステンデットと比べればしょうがないか）

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥアスラン

鈴はカラミティからの怒濤のような砲撃から逃げ続けていた

（さすがに押されているな。まずこちらに注意を向けなければ）

アスランはライフルを三発撃つ

カラミティがそれをシールドで防いでる内に鈴とカラミティの間に入る

「大丈夫か、鈴」

「アスラン！ありがと、おかげで助かったわ」

「礼はいいから早くビットに戻れ」

「ええ、そうするわ。援護したいけどシールドエネルギーの残量が心許ないわね。それより気おつけなさいよ。あいつかなり強いわよ」

「だが、前に戦ったのよりは弱いな」

「え！？あれと戦ったことあるの！？」

「ああ。まあ、そのことについてはいつか話そう」

「話さなくてもいいからちゃんと無事に戻ってきなさいよ」

「ああ、分かっている」

「ならいいわ。あと頼むわよ」

そうして鈴は離れていった

そしてカラミティをミラ見ながら言い放つ

「覚悟はいいか？仲間を傷つけた罪は重いぞ、カラミティ」

そう言い放った瞬間カラミティは二連装衝角砲ケーファー・ツヴァイ、プラズマサボット・バズーカ砲トーデスブロク、二連装高エネルギー長射程ビーム砲シュラークを連射してくる

（さすがにこの弾幕では近づけないな。仕方がない。精密射撃はあまり得意じゃないんだがな）

俺はまずファトゥム－０１を射出するが難なく避けられる

カラミティが再び俺に狙いをつけようとするが後ろから接近するファトゥム－０１に気づき避けようとするが完全とはいかずグリフォン２ビームブレイドに右足を切断され大きく体勢を崩した

「そこだ！」

そのチャンスを逃さずライフルでトーデスブロクを破壊するとさらにライフルでシュラークを破壊し一気に近づくとカラミティはシールドの先端を突きだしてくるが

「そんな攻撃！」

難なく避けるとビームサーベルでカラミティの左腕を切断し

「これでとどめだ！」

ビームサーベルを複列位相エネルギー砲スキュラに突き刺す

――敵ＩＳの機能停止を確認

（どうやらシンの方も終わったようだな。後はキラだけか）

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥ鈴

あたしはアスランの様子をビットから見ていたが正直言って驚いた。あいつの強さは一夏から聞いていたけどここまでとは思わなかった

何となく一夏や織斑先生の反応が気になったのでみんなの方を見てみると全員が目を見開いていたその中には珍しく織斑先生も入っていた

「どうしたんですか織斑先生」

「ああ、凰か。いや、あいつらの実力がここまで高いとは思っていなかった。あの強さは格が違うどころの話ではない、もはや次元が違う。それにそのことを見抜けなかった私自身にも驚いているのでな」

（千冬さんにここまでいわせるなんて、一体何者なの？）

ふとそんな思いが頭をよぎと、あたしは頭を振って追い出そうとする

（あいつが、アスランが何者かなんて関係ない。アスランはアスラン、それだけじゃい）

そんなことを思っていると決着が付いたようだ

（良かった、ちゃんと無事だった）

あたしはそのことに安堵の胸をなで下ろした

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

（敵ＩＳの反応が二つ消えた……。てことはアスランとシンは勝ったんだ。僕も負けられないな）

現在の状況はキラが優位である

（僕の被害は無し。対して相手はドラグーンは全機損失、ビームラ

イフルも無し。あるのはビームサーベルだけ）

もちろんこうなったのは理由があり、一番大きかったのは無人機だからだろう。ドラグーンの操作には超人的な空間把握能力が必要となるため機械では負荷が掛かりすぎるのだ。そのため扱いきれず動きが雑になり次々に撃破されていったのだ

（次で決める！）

そんなことを思っていると大型ビームサービルを展開し上から突撃してくるプロヴィデンス

「覚悟！！プロヴィデンス！！」

ライフルでプロヴィデンスの両足を撃ち抜くがそれでも突撃をやめない

ライフルを捨て、ビームサーベルを両手に持つと

「亡霊は、暗黒に帰れぇ！！」

二本のビームサーベルをプロヴィデンスの胴体に突き刺し、左右に振り抜き切断した

胴体を切断されたプロヴィデンスは地面に落下していった

（これで終わった）

「キラ」

「キラさん」

気づくとアスランとシンがそばにいた

「それじゃ、戻ろうか」

「ああ」

「はい！」

そうして僕達はみんなの所へ向かった

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥ一夏

三人がビットに戻ってきた

「全員戻ってきて良かったな、鈴」

そう隣にいる鈴に話しかけると

「……」

返事がない。不思議に思ってみてみると……泣いてた

（え！？ちょ、あの、鈴さんなんで泣いてるの！？誰か助けてくれ～！）

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥシン

なんか鈴の隣で一夏がすごい慌ててる。どうしたんだ？

「一夏、どうしたんだ？」

「シン！実はお前達が戻ってきたらいきなり泣き出してな」

ああ～、なるほど

「それで理由が分からないため慌てていたと」

「ああ。シンは分かるのか？」

さすが鈍感野郎。全然気づいてないな。ふつうならこの状況から分かりと思うけど。箒も大変だな

「分かるよ」

「じゃあ教えてくれ」

「わかった。えっと、鈴が泣いたのは大好きが彼が無事に戻ってきたからだと思う」

それに瞬時に反応する鈴

「べ、べべべべ別にあたしはアスランのことなんて何とも思ってないし！？」

うわ〜、見事なまでに自爆したな。……少し追い打ちしてみるか

「オレは一言もアスランなんて言ってないぜ」

「〜〜〜〜〜！！！」

さらに追い打ちをかけるセシリア

「それにさっきのはアスランさんのことが大好きですと言っているようなものですわよ鈴さん」

すごい、茹で蛸みたいに真っ赤になった

「ええ、そうよ！！あたしはアスランのことが大好きよ！！好きな奴の心配ぐらいしてもいいじゃない！！」

鈴はそう叫ぶとアスランの方に走っていくとアスランに抱きついた

（まさか開き直って告白するとは……。さすがに予想外だった）

「鈴ってアスランのこと好きだったのか」

一夏がなんか言ってるけど無視しよう。てかやっぱり気づいてなかったのか。ホントに呪いか何じゃないのか？

ちなみにセシリアの隣にいる箒は

「やはり一夏にはあれくらいしなければダメなのだろうか」

などと真剣に悩んでいた

まあ何はともあれ無事に帰ってこれて良かった

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

その日の夜

僕とアスラン、シンは織斑先生に連れられエレベーターで学園の地下に向かっていた

そこはレベル４権限を持つ関係者しか入れないらしい。僕達は今回特別に入ることを許可された

「着いたぞ」

室内には山田先生と僕達が破壊した無人機のＩＳがあった

「どうだ山田君。何か分かったかね」

「織斑先生。これらは――無人機です」

「そうか。にしてもひどい有様だな。一体は胴体を切断され、また一体は両腕を切断され頭部を破壊、もう一体は右足を切断され胸を貫かれたと」

なんかすごい気まずい。おまけにやったのは僕達だから反論できないし

「そんなしけた顔をするな。別に攻めているわけじゃない」

（じゃあなんでそんなこと言うんですか）

「今回ここに呼んだのは他でもない。こいつらに関してだ。知っていることを話して貰うぞ」

まあ、そうだろうね。というかそれ以外に理由がない

「分かっています。ですが三機とも敵側の機体だったのであまり詳しくは知りませんよ」

「ああ、かまないそれとこちらがする質問に答えてくれればいい」

「わかりました」

「では最初の質問だ。こいつらの元になっている機体はお前達が前にいた世界のものか？」

「はい、ですが元になっているというよりはそのまま小さくしたような感じです」

「つまり、そっくりであるだと」

「はい」

「では次の質問だ。こいつらの名前は？」

「僕が戦ったのはＺＧＭＦ－Ｘ１３Ａプロヴィデンス」

「俺が戦ったのはＧＡＴ－Ｘ１３１カラミティ」

「オレが戦ったのはＺＧＭＦ－Ｘ３１Ｓアビス」

「機体の詳細については？」

「それについてはデータを用意したのでモニターを使用しても構いませんか？」

「ああ構わん」

許可が出たのデータが入っているＵＳＢメモリをコンピューターに接続しデータを表示する

「まずカラミティから説明します。こいつは連合に加盟している西洋連邦とモルゲンレーテ社が協力して極秘開発した前期ＧＡＴ－Ｘシリーズの一機であるＧＡＴ－Ｘ１０３バスターの系譜に属する砲戦型の機体ですが、攻撃力はバスターを上回っています。理由はトランスフェイズ装甲の採用に伴う余剰電力の大半を火器に回したからでしょう。また視野の広い後方からの支援砲撃を主任務とする機体特性から指揮官機としての機能を備えています。さらに重量級の機体でありながら各部の高出力スラスターにより高い機動性を持っています。鈴が手こずったのもそれが原因でしょう。弱点としては格闘戦の能力の無さですね」

「見た目で判断したら痛い目を見ると言うことか。高い機動性を有する上に苦手な近接戦に持ち込みたくても弾幕で近づけない」

「そういうことですね」

「次はアビスのを頼む」

「解りました。アビスは連合の水中戦用ＭＳの対抗兵器として開発されたセカンドシリーズの機体です。それ以前にもグーンやゾノといった水陸両用の機体はありますがこれらは基本的に水中での運用を重視しているため揚陸作戦においての機動性に問題がありましたが、アビスの基本形は従来のＭＳと同じ人型であるため、陸上での機動性も確保されています。更に宇宙空間での活動も可能で、水陸両用ＭＳとしての汎用性はグーンやゾノを大きく上回っています。また陸上での戦闘では、機動性を重視しない火力支援用として運用を想定し、多数のビーム砲や格闘専用にリーチの長い格闘兵装を備えています」

「そうか。だがヤマト、グーンとゾノだったか？この二つを出す必要はあったのか？」

「あくまで比較の対象と思ってください」

「解った。最後はプロヴィデンスだな」

「はい。ですがこの機体に関してはデータがかなり少ないですけど構いませんか？」

「構わん」

「解りました。プロヴィデンスは僕とアスランが乗っていた旧フリーダムと旧ジャスティスの兄弟機に当たり、二機と同様に核エンジンが使われています。また攻撃力に加え、出力、運動性、防御力、稼働時間の全てにおいて在来機を遥かに凌駕する性能を誇ります。最大の特徴は、無線式全周囲攻防システム「ドラグーン」の装備で

す。これはモビルスーツ本体から分離した複数のビーム砲端末を同時に無線誘導し、複数の攻撃目標に対し全周囲からの多重的砲撃をかけるもので、戦闘区域を単機で完全制圧することを可能としています。詳細はとりあえずこんなところですね」

「そうか。では次だ。前の世界で戦ったヤツと比べてどう感じた」

「「「弱い」」」

見事に僕らの意見があった

「その理由は」

「やはり無人機だからじゃないでしょうか。前の世界で乗っていたパイロットがエース級の強さだったこともありますが。特にプロヴィデンスはドラグーン使うには超人的な空間把握能力が必要ですし、機体の操縦もしなければなりません。無人機でこれが出来ただけでもたいした物ですよ」

「これで最後だ。生徒で勝てる奴はどれくらいいる？」

「機体の相性などもありますから絶対にこうとは言えませんが、訓練機で勝つのは難しいでしょう。専用気持ちの候補生数人でなら勝てるかと」

「そうか。これで終わりだ、もう戻ってもいいぞ。それと分かっていると思うが」

「ここのことは他言無用。ですよね」

「ああ。分かっているならいい」
「では、失礼します」
そうして僕達は寮に戻った

◇

(今日は疲れたしもう寝ようかな。でもなんか一夏の部屋がなんかうるさい。また何かしたんだろうか)
そんなことを考えているとドアがノックされた
「はい、どちらさまですか」
ドアを開けると山田先生がいた
「どうしたんですか先生」
「はい。ヤマト君お引っ越しです」
「どこにですか?」
「織斑君の部屋です」
でも一夏の部屋って箒もいたような
「篠ノ之さんは部屋の調整が付いたのですでに引っ越しました」
「分かりました。それじゃあ荷物をまとめますので」

まあ、荷物なんて全然無いんだけどね

「それじゃぁ、なるべく今日中にお願いしますね」

「わかりました」

そう言うと山田先生は帰っていった

（さてと、それじゃ荷物をまとめようか。まあ、三分もあれば終わると思うけど）

〜三分後〜

（ホントに三分で終わっちゃったよ。少しは部屋のもの増やすべきかな。前にもセシリアに言われたし）

そんなことを少し真面目に考えながら部屋を出ると一夏の部屋の玄関に箒が立っていた

（箒？何してるんだろ？）

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

（学年別個人トーナメントって確か完全自由参加の個人戦だよね。あれがどうしたんだろ？）

「わ、私が優勝したら――」

なんか箒の顔がすごく赤い。今すぐ倒れてもおかしくないくらい

赤い

「つ、付き合って貰う！」

「はい？」

部屋から一夏の間抜けな声が聞こえてきた

（えっと、僕どうすればいいんだろ？）

ＳＩＤＥＯＵＴ

乱入者（後書き）

敵をプロヴィデンス、カラミティ、アビスの三機にしたのは三機とも三人の内誰かに落とされてるからです

何となく因縁があった方が面白いかなーと思ったので

とりあえずこれで一巻の内容は終わりです

次の話はもしかしたらオリジナルの話を書くかもしれません。そうでなければ二巻に突入になります

それではまた次回お会いしましょう

噂と黒幕（前書き）

今回は若干短めです

噂と黒幕

六月頭、日曜日　夜

ＳＩＤＥ一夏

今俺はいつものメンバーと一緒に食堂に来ている。ただしキラと箒はいない。キラはなんか用事があるらしい。箒は……なんか気まずいんだと思う

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから織斑君とヤマト君とザラ君とアスカ君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで――」

いつものことながら、思春期女子で埋め尽くされた食堂はかしま

しい。俺達はまず奥の方で十数名がスクラムを組んでいる一段に気が付いた

「ん？なんだあそこのテーブル。えらい人だかりだな」

「トランプでもやってんじゃなの？それか占いとかさ」

「たぶん違うんじゃないか？」

「何でだシン？」

「いや、前にキラさんから変な噂が女子達の間に流れてるって聞いたことがあるからさ」

「噂ってどんなのですの？」

「いや、オレも詳しいことは。アスランはなんか聞いてない？」

「残念だが俺も詳しいことは何も。ただ俺達に関係あることらしい」

「俺達に？」

「ああ。正確には俺、一夏、キラ、シンの四人らしい」

「他にはなにか知らないの（ですか）アスラン（さん）！？」

それを聞いた瞬間鈴とセシリアがものすごい表情でアスランを問いつめてる

（そういや鈴はアスランのこと好きなんだっけ。あの告白はすごか

ったな。でもセシリアは何でだ？）

一夏がそんなことを考えているとシンが話しかけてきた。ちなみにアスランは隣で必死に鈴とセシリアをなだめている

「なあ一夏」

「ん？なんだシン？」

「何でセシリアが問いつめてるのか分からないのか？」

「ああ」

「誰か好きになったこと無いのか？いっとくけど異性としてだから」

「無いな。そもそも女子との知り合いなんて中学以前は千冬姉以外だと箒と鈴くらいだからな」

「何でそんなに少ないんだ？」

「さあ？そういえば前に箒と鈴が悪い虫云々言ってたな」

（一夏が鈍感になった理由ってあんた達なのかよ！つか自分で蒔いた種の所為で苦労するって……）

何かシンが溜息をついて呆れてる。どうしたんだ？

それにしても今日の盛り上がりはいつもよりさらに熱気を増していて、何かのたびにどよめきが起きる。何なんだ？

「えええっ！？そ、それ、マジで！？」
「マジで！？」
「うそー！きゃー！どうしよう！」
（俺達に関係ある噂か。そんなに面白いとは思えないけど。まあいいや、それよりも早く食べないとな。飯が冷めちゃうし）
ＳＩＤＥＯＵＴ
ＳＩＤＥアスラン
それから五分後、キラが俺達に所に来た
「お待たせ、みんな」
「よう、キラ。用事は済んだのか？」
「うん。それとアスラン、これを」
キラが俺に折りたたまれた紙を渡してきた
「これは？」
「報告書……みたいなものかな」
「アスラン、キラさんになんか頼んでたのか？」
「いや。今見てもへいきか、キラ」

「うん。大丈夫だよ」

許可が出たので紙を開くと女子の間に流れている例の噂について書かれていた

「なあ、アスラン。なんて書いてあるんだこれ」

隣からのぞいている一夏が聞いてきた

「（書かれているのは前の世界の文字だから一夏は読めないんだったな）例の噂についてだな『月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑、ヤマト、ザラ、アスカの内1人と交際できる』……どうゆうことだキラ」

「どうゆうことって、それが流れてる噂なんだけど」

「噂を消すことは出来ないのですか？」

「それが出来ればいいんだけど、もうかなりの人が信じちゃってるから無理だと思う」

「そもそも何でこんな噂が流れてるのよ。てか普通嘘だって思うでしょ」

「原因は布仏さんが適当に言いふらしたから。それにたとえ嘘でも大勢の人間が信じれば嘘は真実になるからね」

「「布仏……。あいつか……」」

「「ふふふ、ふふふふふ……」」

（あいつには少しＯＨＡＮＡＳＩが必要だな）

「お、落ち着けよ四人とも！」

「そ、そうだよ！そしてシンは戦闘中でもないのに何でＳＥＥＤ覚醒してるの！？あとセシリアと鈴！何不気味な声で笑ってるの！？頼むからみんな元に戻って！」

十分後、キラと一夏のがんばりにより四人は元に戻った

ちなみにアスランのＯＨＡＮＡＳＩはきちんと実行されたとか

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥ？？？

同時刻とある貿易会社にて

あたしらは今ある貿易会社に来ている。といっても貿易会社というのは表向きで本当は裏では主に武器や違法品の密輸を取り仕切っている。そのなかにはＩＳ関係の物もある

「本当に付いてくるの？」

「ああ。あいつは信用できない」

「彼はあくまでビジネスパートナーなんだけど」

「それでもだ！」

「分かったわ。でも話の邪魔はしないでよ」

「分かってる」

そんなことを話している内にドアの前に着いた。この部屋に今回会いに来た人物がいる

コン、コン

軽くノックをする

「入りたまえ」

返事が来たので部屋に入る。部屋の中には1人の男がいた

「君かスコール、待っていたよ。それとオータムその殺気は抑えてくれないかね」

「断る。アンタは信用できないからね」

「そうか。まあいい。用件は前に渡した無人ＩＳのことかね」

「ええ、そうよ。襲撃させた三機、全部落とされたわよ」

「そうか。まああれらは所詮第二世代、訓練機が相手なら問題ないが専用機が相手ではせいぜい時間稼ぎがいいところだろう。相討ちに出来れば上出来だ」

「そう。でもあの銀色のヤツは違うでしょ」

「ああ。だがあれはあくまで第三世代の試作器だ性能はほとんどかわらんさ」

そんな風に話はどんどん進んでいく。

（正直あたしはこいつが信用できない。こいつは一年くらい前に突然裏の世界に現れた。最初は放置しても問題ないと思ってた。でも違った。気づいたときには裏の世界への影響力はかなりの物になっていた。特に密輸に関してはこいつが全て仕切っていると言ってもいいくらいだ。そうしてこいつはたった一年で裏の世界では知らぬ物はいないほどになった。こいつのことは普通なら誰もが信用するだろう。それだけの結果をこいつは出してきた。でもあたしは信用できない。こいつは、ロード・ジブリールは）

ＳＩＤＥＯＵＴ

噂と黒幕（後書き）

作「やっと出来た……」

ア「時間掛かりすぎだろ」

シ「しかも短いし」

作「テストの結果がね……」

キ「まさか留年？」

作「いや、さすがにそれはないと思う」

ア「次はもう少し早めに完成させろよ」

作「りょうか～い」

シ「では次回『転校生』」

キ「誤字脱字、感想などありましたらお願いします」

依頼（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません

遅れた理由はいろんなネギま！の小説を読んでいる内に自分も書いてみようかな～と悩んでいたのです。

まあ書くことにしました。どこまで続けられるか解りませんが近いうちに投稿しようと思ってますのでよろしくお願いします

ではどうぞ

４／１７　誤字修正しました

依頼

夕食後　寮の自室

ＳＩＤＥキラ

「キラ……もう少し手加減してくれよ……」

「一応これでも手加減してるんだけどね」

「いやいや１６連鎖やっといて手加減したはないだろ！？」

「最高記録は２５連鎖だよ？」

「……勝てる気がしないｏｒｚ」

現在僕と一夏はぷよ〇よで対戦していた。結果は十戦中十勝で僕の完勝。さらに敗者勝者にジュースをおごるというルール付き

「くっそ～～。なあキラやっぱり」

「一夏、ルールはルールだよ」

「だよな～」

ピンポ～ン

「ん？誰だろ？」

「ヤマト、いるか？」
「千冬姉？キラ呼ばれてるぞ」
「うん」
玄関ドアを開けるとそこには織斑先生とアスラン、シンがいた
「どうしたんですか織斑先生？」
「お前に頼みたいことがあってな。引き受けてもらえないか」
「内容によりますが」
「例の三機の修復及び強化だ」
「それくらいなら構いませんけど」
「助かる。では着いてこい。詳細はエレベーターの中で話す」

◇

現在エレベーターで地下の研究室に移動中
「では織斑先生。説明を聞かせてください」
「解っている。最初に言っておくがこの件は学園からの依頼という形になる。そのためお前達には作業が完了次第報酬が渡される。さらに技術提供という形になるが研究室の使用許可が下りる。資金も予算の一部からある程度は持ってくれるらしい」

「よくそこまで許可がおりましたね。特に予算」

「それだけお前達が持っている技術が欲しいと言うことだろうな。では説明に入るぞ。まずあの三機を修復する理由だが目的は戦力の増強だ。今後以前のように襲撃され無いとも限らん。それに教師と専用機持ちだけで対応しきれなくなる可能性もあるからな」

「じゃあ強化の方はどうするんですか？」

「強化にかんしてはあくまで性能面――ＯＳや機動性などだけで構わない」

「いや、それだけでもかなりの項目があるんですけど」

（しばらくは徹夜確定だねこれは……。いやでもインフィニットジャスティスを開発していたときに比べればかなり楽なはず……）

「そういえば何でオレ達に頼むんですか？普通に考えて整備班の仕事じゃないんですか？」

「確かに本来なら整備班の役目だ。だがあいにく全面装甲の機体なんて初めてだから結構とまどっていてな。ヤマトとザラは前の世界でＭＳの開発に携わっていたのだろ？それなら適任だと思ってな」

（実際に僕とアスランはあるから否定できないね。）

「シンは開発に携わったことがあるのか？」

「あるわけ無いだろ。簡易整備くらいしかないっての」

「何だそうなのか。まあ助手くらいにはなるだろ」
「まあいいですけど」
「そういえば織斑先生。あの三機修復したとして誰が使うのですか？」
「それが無人機のデータを取りたいとの上から連絡があってな。ＡＩを搭載した上での無人機ということになった」
ガコンッ
説明している間に目的のフロアに到着した。そのままっすぐ進み扉を開けて研究室に入る。ちなみに以前入ったときと同じ部屋である
「お前達にはここで作業して貰うことになる。それと認証カードを渡しておく」
織斑先生はそう言うと僕らにカードを渡してくる
「これを使えばここまでこれる。言っておくが絶対に紛失したりするなよ。した場合は罰として特別メニューの訓練を受けて貰う」
特別メニューの訓練って……。前に誰かが罰で受けさせられてるの見たけどはっきり言って戦場にいる方がまだましだよ……
「それと必要な部品に関しては言ってくれればこちらで注文するようにしておく。他に何かあるか」

「織斑先生」

「なんだヤマト」

「ＯＳを組み立てるのに必要なんでパソコンを支給してもらえませんか」

「解った。後で取りに来い」

「はい」

「他に無ければ解散とするが、いいな。では解散。もうすぐ消灯時間だ。さっさと寮に戻れ」

「「「はい」」」

◇

そのあとアスランとシンはそのまま寮へ。僕はパソコンを受け取ってから寮に帰り眠りについた

ＳＩＤＥＯＵＴ

依頼（後書き）

感想意見ありましたら是非お願いいたします

転校生

ＳＩＤＥシン

現在織斑先生から連絡事項の説明中

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように」

（実戦訓練か。そういや初めてＩＳを起動したときＭＳとは全然違って焦ったな。なんせ体全体使うんだもんな）

「各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けて貰う。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

「いや構うでしょ！」

（しまった、つい突っ込んでしまった……えい、ままよ、あとは野となれ山となれ！）

「なんだアスカは女子の下着姿は見たくないのか？」

「見たい見たくないの問題じゃなくて社会的にいろいろとまずいだろ！それにたった四人だけど男子だっているんだから！アンタそれでも教師か！？」

「問題ない」

「何で言いきれる！？」
「私が担当だからだ」
「アンタはどこまで傲慢なんだ！」
「慢心せずして何が王か！？」
「どこの金ピカだよ、アンタは！？」
「ま、本音はさておき」
「冗談じゃないのかよっ！？」
「では山田先生、ホームルームを」
何事もなかったかのように山田先生にバトンタッチする織斑先生
「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」
「え……」
「「「えええええっ！？」」」
いきなりの転校生紹介にクラス中がざわめく。それもそうだろう。何せ情報網をかいくぐっていきなり現れたのだから
（でも、何で内のクラス？分散させるのが普通だろ？）

そんなことを考えていると教室のドアが開いた

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる

何せ、そのうちの1人が男子だったのだから

だがコーディネーター組はその男子ではなくもう1人の少女の方に注目していた

（（（軍人……））））

一目見て自分たちと同じ軍人だと三人は感じ取った

（あいつ、オレ達と似ている感じがする。でも遺伝子操作が出来るほどの技術があるとは思えないし、だからといってエクステンデットってわけじゃなさそうだし。それになんだかいやな予感がする……）

何故かそんな気がするのでオレは念のためすぐに動けるようにしておくことにした

◇

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の1人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する
「お、男……？」
誰かがそうつぶやいた
「きゃ……」
（あ、まずい……）
瞬時に耳栓を装着するコーディネーターズ＋織斑先生
「はい？」
「きゃあああああーーーーっ！」
だが耳栓の意味はなかった
（耳栓しても防げないって……人間が出せる音量じゃないだろ……）
そんなことを思いながら耳栓をはずしている内にクラスの中心を起点に歓喜の叫びはあっという間に伝播する
「男子！五人目の男子！」
「しかもうちのクラス！」
「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球の生まれてよかった～～～！」

（男子が来ただけで何でここまで元気になれるんだ？男が珍しいって事はないはずだけど。でもＩＳが使えるって意味じゃ珍しいか）

隣のクラス及び他の学年からまだ誰も覗きに来ないのはＨＲ中だからだろう

「あー、騒ぐな静かにしろ」

面倒くさそうに織斑先生がぼやく。仕事というより、こういう十代女子の反応が鬱陶しいようだ

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

「……」

当の本人は未だに口を開かず、腕組みをした状態で教室の女子達を下らなそうに見ている。しかしそれもわずかのことで、今はもう支店をある一転……織斑先生にだけ向けていた

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直し、異国の敬礼を向け素直に返事をする転校生

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるラウラはぴっと伸ばした手を体の真横に着け、足をかかとで合わせ背筋を伸ばしている

（どう見ても軍人だよなやっぱし。それにあいつの雰囲気からして確実に所属は実戦部隊。しかも専用機持ちとなれば特殊部隊に所属のエリート様ってとこか）

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

クラスメイト達の沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた貝のように口を閉ざしてしまった

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

そう言うとラウラは一夏の目の前に行き、振り上げた腕を一夏に――振り下ろせなかった。なぜならオレがボーデヴィッヒの腕を掴んでいるからだ

「初対面の相手を殴ろうとするなんてドイツの挨拶はずいぶんと変わってるんだな」

そう言うとボーデヴィッヒはオレを睨み付けてくる。若干殺気のようなモノをたたき付けてきているがはっきり言ってきれいすぎて全然恐くない

「なんだお前は」

「オレはただの一夏の友達だ」

そう言い、殺気をぶつける

「……くっ」

腕を無理矢理振りほどくと空いている席に座り腕を組んで目を閉じた

「アスカ、席に戻れ」

「はい」

「ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第２グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

さてと、さっさと移動しよう。今日は第２アリーナの更衣室が空いていたはず

「おいヤマト。デュノアの面倒を見てやれ」

「わかりました」

教室を出る前に四人と合流する。理由はこの方が安全だからだ

「えっと、ヤマト君って誰？」

「僕だよ」

「あ、君がヤマト君？僕は――」

「自己紹介は後だ」

「今は移動する方が先だろ。女子が着替え始めるか」

「そうだね。それじゃ急ごうか」

そうして教室を出た

◇

（ミッションスタートだ！）

教室を出るときに変な電波を受信したけど気にしないようにしよう

ＳＩＤＥＯＵＴ

転校生（後書き）

感想よろしくお願いします

ミッション　シャルルを更衣室まで護衛しろ（前書き）

今回の話は銅四十グラム、亜鉛二十五グラム、ニッケル十五グラム、反省五グラム、思いつき九十七キロで錬成されています

ミッション　シャルルを更衣室まで護衛しろ

ＳＩＤＥアスラン

「お前たちちゃんとデュノアを案内（護衛）しろよ。いざとなれば武力行使も許可する」

「了解」

今日はいきなり転校生が二人も紹介された。しかも片方が男子で噂好きな十代女子達の情報網をくぐり抜けてだ。そうなれば一秒でも早く転校生――デュノアの情報を得るために全力でここに向かってきているだろう。そして捕まれば質問攻めに合う→遅刻する→織斑先生に出席簿で叩かれる、という図式が成り立つのは火を見るより明らかだ。はっきり言ってそれだけは避けたい。あれは人間に出せる威力じゃない

そんなことを考えている内に階段まで来ると視界の端に三階へ上る階段の影から生徒――リボンの色からしておそらく二年生――が出てくるのが見えた

「転校生発見！」

シャルルの姿を確認するといきなり先端に分銅が付いたロープを投げてきた

俺は反射的に懐のホルスターからベレッタＭ８４を取り出し構えると引き金を引く

銃口から放たれた弾は分銅に当たりロープの軌道を逸らした

「今のうちに進め！」

「ダメだ！下からも来る！」

下の階からライオットシールド（警察が暴徒鎮圧の時に使う盾）を構えながら接近してきているのが見えた

どこから持ってきたそんな物！？

シンもＦｉｖｅ－ｓｅｖｅＮを取り出し、引き金を引き牽制するが弾がゴム弾なので全て弾き返されるのであまり効果はないようだ

（まさか待ち伏せしたのか！？馬鹿な、ＨＲが終わってから一分も経っていないぞ！）

「者共出会え出会えい！」

「後ろからも来る！」

（くそ、完全に囲まれたか。残ってるのは右側の通路だけ。どうする？！）

頭の中で校舎の地図を思い浮かべながら考える

（この先は男子トイレがあるだけで行き止まりのうえに一本道。いや、確かアレが置いてあったはず）

「四人ともよく聞け。このままでは捕まるのは目に見えている。なので俺達はこの先にある男子トイレに向かう。あそこなら多少の時間稼ぎが出来る。先頭は一夏とデュノア、殿は俺達が勤める」

「……。分かった。行くぞ。シャルル」

「え、でもヤマト君達はどうするの？」

どうやデュノアは先に行っていいのか少し迷っているようだ

「僕達のことは心配しないで」

「大丈夫だって。ちゃんと追いつくからさ」

「迷うな、とっとと行け！」

「分かった。気お付けてね」

二人は振り返ることなく走っていった

「（行ったか。弾の残りも後わずかか）キラ、シン。三秒後に合図をする。それと同時に俺達も引き上げる。いいな？」

「オレは良いぜ」

「僕も。カウントよろしくね」

「分かった。３，２，１，ＧＯ！」

合図と同時に一斉に背を向け走り出す

「あ、逃げた！」

「逃がすな、追え！」

そしてその後に続く大量の足音。転校生１人のために一体どれだけの生徒が来てるんだ

二十メートルほど走るとトイレのドアが見えてきたが中には入らず、二メートルほど前で止まり壁に偽装してあった巨大な扉を三人で閉める

ちなみに扉の設置に関しては学園の許可は取ってあるので問題ない

「大丈夫か、三人とも」

「一夏か。ああ問題ない。それより用具入れから青い丸の目印が付いたギターケースと赤い丸と赤い四角形の目印が付いたヴァイオリンケースを一つずつ持ってきてくれないか。鍵は開いているはずだ」

「ああ、わかった」

そう行って一夏はトイレの中に戻っていった

ＳＩＤＥＯＵＴＯ

ＳＩＤＥ一夏

オレは今アスランに頼まれてギターケースとヴァイオリンケースを取り出すために用具入れの前に立っている

とりあえず用具入れの扉を開いてなかを確認するとギターケースとヴァイオリンケースが三つずつ入っていた

えっとギターケースは青い丸でヴァイオリンケースは赤い丸と赤い四角形だったな

お、あった。これとこれとこれだな

目印はきちんと見えるようになっていたので見つけるなは簡単だった

（まずギターケースから運ぶか）

ギターケースをリュックサックのような感じで背負い、両手にヴァイオリンケースを持つ

（これギターにしては重いな。持ったこと無いけど）

とりあえずアスラン達にさっさと渡すか

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

アスランが頼んでから十秒くらいで一夏が出てきた

隙間から外を見ると扉から五メートルほどのところに追いかけてきたであろう２０人ばかりの生徒が集まっている

今は扉を挟んで対峙している状態だ

「とりあえず持ってきたけどどれを誰に渡せばいいんだ？」

「ギターケースは僕だね。ヴァイオリンケースはアスランとシンに渡して」

「了解。それにしても楽器なんかでどうするんだ？歌でも歌うのか？銀河の妖精とか超時空シンデレラみたいに」

「歌わないからな。しかも作品違うから。しかも二十五周年記念作品。というか歌姫ですらないし」

「じゃあシャロンア○プル？」

「歌聞いたら洗脳されるだろ。てかもはや人間ですらないじゃん。一夏伏せ字の部分はちゃんと考えろよ。あとメタ発言はそこでにしておけって二人とも」

とりあえず気を取り直してギターケースの金具をはずし蓋を開けると中からＭＧ３を取り出すと弾倉を取り付け銃身のカバーをはずし右側に付いているレバーを引く。次に弾倉から弾を取り出し薬室に装填するとカバーを閉じる。念のため構えて銃身が曲がっていないか確かめる。問題なし

「キラそっちは終わったか？」

どうやら二人も弾の装填と点検が終わったようだ。ちなみにアスランはスペクトラＭ４を、シンはＰ９０を持っている

「うん。終わったよ」

『あー、男子一味に告ぐ。諸君らは完全に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す、諸君らは完全に包囲されている。大人しく投降しなさい』

『三分間待ってやる』

そして沈黙が周りを支配する

「……」

「……」

「……」

「……」

「……とりあえず立ち位置と役割の確認をしておこう。まずキラは中心で弾幕を張り、数を削る。俺とシンは撃ち漏らしたのを片付ける」

目線会議の結果女子達の古い警察の警告とム〇カのセリフが混じったようなモノには突っ込まないという結果になった

「僕達は何をすればいいの？」

「そうだね、それじゃ合図したらこれを投げて」

ギターケースから円柱状のモノを取り出し一夏とシャルルに渡す

「なんだこれ？」

「スモークグレネード」

「……。ｒｅａｌｌｙ？」

「一夏、言葉が英語になってんぞ。ま、大丈夫だろ。健康に害があるわけじゃないし」

「そ、そうか。なら平気だな」

「えっ、問題そこなの？！」

とりあえずそこには突っ込んだら負けだと思うのだが、シャルルは我慢できずに突っ込んでしまったようだ

『時間だ、答えを聞こう』

もはやセリフが完全にム〇カになっている

ここでバ〇スとか言ったら完全にアウトだよね、などと思ったのは秘密である

代表でアスランが答える

「答えは、否だ！」

『交渉は決裂ね。全軍前へ！』

リーダーらしき二年生が号令を掛け、ライオットシールドを構えた三人の一年生を先頭に接近してくる

「それじゃあ準備はいい？それじゃいくよ、３，２，１，ＧＯ！！」

扉を蹴破ると二脚を掴んでＭＧ３を構え引き金を引く

轟音と共に薬莢が排出され放たれた弾（ゴム弾）は大気を引き裂きながら目標へ襲いかかる

女性陣は弾丸の嵐に負けじと進んでくる

キラ達も近づけさせまいと弾幕を張るが盾に阻まれなかなか足を止められずついに距離が三メートルを切った

「一夏、シャルル、今！」

「おう！」

「わ、わかった！」

一夏とシャルルがスモークグレネードを投げると同時に撃ち方を止める

スモークグレネードはちょうど隊列の真ん中当たりに落ちると破裂音と共に周囲に煙をまき散らす

「けほ、けほ。な、何これ～？」

「前どっちー？」

「痛っ！今足踏んだの誰！？」

「早く窓を開けなさい！」

先ほどまで見事なまでの統制がとれていたが一気にバラバラとなった

そして何かが倒れる音がした。見るとライオットシールドが三つ倒れていた。つまり現在彼女らに身を守るための道具はない

そしてこの機会を見逃すはずはなく新しい弾倉に交換すると再びフルオートで撃ち始める

「「「「「「「きゃあああああああぁ……」」」」」」」

そして廊下に響き渡る女子達の断末魔の叫び声（死んでないけど）と次々に倒れ伏していく音

撃つのを止め窓を開けると5秒ほどで煙がはれると現れたのは女子達の死体（繰り返し言うが彼女たちは死んでいない）

「よし、いくぞ」

そして僕らはその場を後にし、更衣室へと向かった

ＳＩＤＥＯＵＴ

ミッション　シャルルを更衣室まで護衛しろ（後書き）

更衣室行くだけで何故こうなったんでしょうか……

ミッション　シャルルを更衣室まで護衛しろ

ここは一年生の教室の一つだ。

だが教室の光景は机が並び友人達との会話を楽しんでいるといったごく普通のモノではなく通信用の機器が並び中央の台には校舎からアリーナまでの地図が広げられその周りを五名ほどの生徒が囲んでいるという、まるでどこかの軍の司令部のような光景となっていた。

ＳＩＤＥとある女子

私達はいま転校生を捕まえるためにある作戦行動を行っていた。

作戦といっても目標はただ単に転校生を拉致するだけだが。それに拉致といってもただいろいろ聞くだけで特に害を加えるつもりはないわけだしおとなしく捕まってくれないものか。

それにしても私達の情報網をどうやってくぐり抜けてきたのか。担任に金を握らせて何かあればすぐに情報を回すようにしてあるのだが。おかげでまともに準備も出来なかったし、他クラスや上級生との連携もとれていない

「現在の状況は？」

「全滅です。現在防衛戦を突破」

「他のクラスと連絡とれた？」

「だめです。どうやら向こうも独自に動いているようで」

実働隊は捜索隊と防衛戦に全て使ってしまった。これで私達はゲームオーバーね。

「そういえばあの変態はどこにいったの？」

「さあ……」

ＳＩＤＥＯＵＴＯ

ＳＩＤＥキラ

僕達は女子の一団を突破した後別のグループと交戦したが撃破し今は一階の廊下を走りながら移動している。さっきの戦闘で弾もだいぶ使ったから斬弾が心許なくなってきた。

アリーナの入り口が見えた。当然前には女子の一団が待ちかまえている。僕達に気付いたのか武器を手に取り構える。

「ねえキラ」

「何？シャルル」

「この学校っていつもこうなの？」

「いつもではないけどね……」

ぐわっしゃん

突然僕達の目の前で防弾仕様の窓ガラスを強化された窓ガラスごとぶち破って、白い影が教室から廊下に飛び出て来た。

「とうっ！」

ガラスの破片を輝かせながら、廊下に降り立ったのは白衣の女性（本名不明）。

白い制服の肩からなびく純白のマント。

腰には黒鞘の刀を差し、顔には眼差しを隠すマスク。頭には白い犬耳と真っ赤なリンゴを一つ。

「「「「「「……」」」」」」

全員絶句。

こんなふざけた格好の奴。この学校には1人しかいない。1人いれば十分だ。

「ピンチだね！」

着地からすっと立ち上がり、同時に白い歯を煌めかせながらその変態は言った。

彼女の向こう側では、女子達が呆気にとられている。まあ無理もない。さすがの僕達も初めて見たときは呆気にとられたからね。

「やあ男子諸君。また会えたね！――久々にあった私への愛情溢れる言葉さては何かな？」

「「「「どけ！」」」」

シャルル以外全員即答。

そして持っている銃をフルオートの連射を始める。一夏も持っていたスコーピオンを連射している。（防衛戦を突破するときに渡した）

廊下を轟音が包み込み、空薬莢が狂ったように舞い踊る。それぞれの銃口から飛び出た弾丸は、狙い違わず変態仮面女へ、音よりも速く飛んでいくが、

「これは困ったね」

瞬時に抜刀した変態の目には見えない刀さばき。弾丸は全て刀に弾かれ、時にポケットから出されたトマトを粉砕し、

かちん。

とうとう残弾ゼロ。しかしまだ終わらない。今度はＩＳに粒子変換して格納しておいたステアーＡＵＧをとりだすと安全装置を神速で外し、片手でフルオートの連射を始める。アスランはＦＡＬ、シンはＲＰＫを使用。当然片手でフルオートの連射。

しかし、弾丸は全て刀で弾かれるかトマトを潰すだけで一発も命中せず、

かちん。

再び残弾ゼロに。

「この……、変態……、オレ達に、何か、恨みでもあんのか？」

シンが相当引きつった笑顔で、その変態へ訊ねる。

変態は、首を横に振りつつ答える。

「そんな恨みだなんて、あるわけない」

「じゃあ……、俺達を怒らせるのが趣味なのか……？」

アスランの質問。変態はさらりと笑顔で言い返す。

「そんな趣味もないよ。私にはただ正義を愛する騎士として君たちを守りたいという純然たる愛情しかない」

どっごーん！

シン発砲。粒子変換で取り出したブラックホーク４４マグナムリボルバー片手撃ち。

「この腐れ外道がー！」

シン絶叫。親指でハンマーを起こして、ドッゴーン。二発目発砲。

「アンタの血は何色だーっ！？」

〃さて何色でしょう？次の五つからお選びください。

Ａ・赤色

B・レッド
C・ロッソ
D・トマトの色
E・以上全て　配点・二十点〃

そんな問題が書かれたプラカードを持ちながら、どっごーん、首をひょいひょい動かしながらシンの射撃を避けていく。正確な射撃は、どっごーん、避けやすいものなのだ。容赦なく、どごーん、額を狙っているシンもシンだが、どっごーん。

結局六発全部撃って弾切れ。

シンは無駄弾撃ちのくたびれ儲け。

「奴を銃で倒すのは無理か……。キラ、併せろ！」

「わかった！」

模造刀の二刀流でアスランが斬りかかる。変態はそれを防ぐ。隙をついて僕が模造刀で斬りかかる。さらにアスランがそれに併せて攻撃する。

（くっ、これは……まずい……）

次第に押されていく変態。そしてついに、

「これで！」

「終わりだ！」

同時攻撃が直撃する。

「……無念……」

そして変態は廊下に倒れ、頭のリンゴは潰れた。

「者共出会え出会えい！」

「今のうちに転校生を！」

くっ、もう追っ手が来たのか！

前の一団もライオットシールドを構えているので全員無傷。

流れ弾で倒れてくれればよかったのに。

「窓から出ろ！キラと一夏はシャルルを守れ！俺とシンは殿を勤める！」

「わかった！いくよシャルル！」

「う、うん！」

僕達が脱出すると二人も出てきた。

「研究棟を目指す。あそこにはアリーナへの近道がある」

「わかった」

しかしそれを女子が見逃すはずはなく

「逃がすな！」

「なんとしても阻止しろ！」

八名の女子が追いかけてくるがそのうちの１人の女子はガトリング砲を持っていた。

「なっ！？Ｍ１３４だと！？」

「どっから持ってきたんだよ、そんなもの！？」

しかもその女子はかなり体格がよく、十数キロはあるガトリング砲を軽々と持っている。

アスランは持っていた模造刀をしまうと今度はＭＧ４２を、シンはＭ１６ををセミオートで連射。女子もＭ１３４やステアーＭ９などのサブマシンガンを連射。

「いくぞ！」

研究棟に向けて走り出す。女子もそれを追いかける。

しばらく走ると前から十名ほどの集団が迫り来る。

「校舎の中に戻れ！」

「わかった！」

校舎の中に戻り進んでいくとアリーナへの通路が見えてきた。そ

ここには先ほどまでいた女子の姿は消えていた。

「何とか撒けたか」

「みたい…だね…」

「よし。キラとシャルル、一夏はアリーナに入れ。そうすれば向こうも手出しは出来ないはずだ」

「二人はどうするの？」

「俺とシンは攪乱のためここに残る」

「む、無茶だよ、そんなの！」

「安心しろ、後でちゃんと合流する」

「……わかった。約束だからな？」

「ああ」

「早く行けって」

「気を付けてね」

僕達はアリーナの中に入った。

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥアスラン

キラ達がアリーナの中に入るのと同時に女子達がわらわらと集まってくる。

「シン。元ザフトのエースの力、見せて貰うぞ」

「そっちこそ、大戦の英雄の力、見せて貰うぜ」

俺達が互いに不敵に笑うと相手が突撃してきた。

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＥＤキラ

アリーナの中には伏兵が何人かいたがたいしたこともなく順調に進みついに更衣

室にたどり着いた。

「何とかたどり着いたな…」

「でも授業には間に合いそうにないね」

「あ……」

時計に示されている時間を見て一夏は項垂れた。今からでは走ったとしても間に

合わない。

それと同時にアスランとシンが更衣室に入ってきた。

「はやっかったね二人とも」

「ああ。何故か向こうがいきなり退いたからな。それより一夏はどうしたんだ？」

「時間」

「は？ああ。そういうことか」

「てことはまた出席簿くらうのかよ…。フケよっかな……」

「さらに重いのが来るぞ」

「だよなぁ…」

「「「はぁ～……」」」

あの出席簿で叩かれるとなると気が重くなる。

「えっと、みんなどうしたの？」

シャルルは分かってないようだ。まあ転校初日だから仕方ないかな。

いまできるはこれ以上授業に遅れないために早く着替えてグラウンドに向かうこ

とだね。

はぁ〜……。

SIDEOUT

（ミッション失敗だ）

ミッション　シャルルを更衣室まで護衛しろ（後書き）

もはや学園モノじゃない・・・

授業

ＳＩＤＥアスラン

シャルルを無事に更衣室まで連れてくることは出来たが時間が掛かりすぎため授業は遅刻することが確定した。

「一夏、いつまでそうしている気だ？」

「だって千冬ね、じゃなくて織斑先生の授業で遅刻だぞ。サボっていいか？」

「代償にさらなる地獄を見る羽目になるぜ？」

「だよなぁ」

「ここにいてもしょうがないし、着替えてなるべく早く行く方がいいと思うよ」

そう言うとキラは制服を脱ぎ捨てた。

「わあっ！？」

今の声はシャルルか？かなり顔が赤くなっているな。

「どうしたのシャルル？顔が凄く赤いけど」

「な、何でもないよ！そ、それより着替えるからあっち向いててね？」

「そう？ならいいけど」

シャルル、その反応は自分から正体をバラしているようなものだぞ。まあ見る奴によっては一発で分かるだろう。織斑先生なんかは確実に気づいているだろうな。

「なぁ、アスラン。シャルルってやっぱし女性だよな」

「間違いなくそうだろうな」

「どうすんだ？」

「とりあえずキラに任せよう。あいつもシャルルが女性だということには気が付いているはずだ。それに織斑先生からも面倒を見るように言われているしな」

「必要なら助ける？」

「ああ。その必要はないと思うがな」

さてと着替えも終わった。さっさとグラウンドにとするか。

「そっちは着替え終わったか？」

「ちょうどね。一夏、シャルル行くよ」

二人も準備はいいようだな。それでは行くとするか、死地（グラウンド）へ。来世で会おう。

◇

「さて、言い訳を聞こうか遅刻者共」

俺達の前には修羅がいる。

「ヤマトから聞こうか」

「変態のせいです」

バシーン！

キラが出席簿で叩かれた。シャルルはそれを見て引いている。

「次、アスカ」

「変態のせいです」

バシーン！

シンが出席簿で叩かれた。シャルルは顔が青ざめている。

「次、ザラ」

「変態のせいです」

バシーン！

出席簿で叩かれる。これが人に出せる威力なのか。シャルルは涙目になっている。

「次、織斑」

「サエ〇ド仮面のせいです」

ゴンッ！

出席簿の角で叩かれた。一夏は蹲った。シャルルはキラにしがみつきながら震えている。

「デュノアは…初日だから何も言わんが次からは気を付けろ」

「は、はい！」

「お前達はさっさと列に入れ」

許可が出たので列の端に加わる。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

「道が混んでたから」

どうやらキラの隣はセシリアのようだ。四月のクラス代表決定戦以降、やたらとキラに構っている。まあ頑張れとしか言いようがないがな。

「アンタ達何やってたの？いつもは間に合うくせに」

「まあ、いろいろだ。それよりセシリア、鈴」

「なんですの？」
「なによ」
「うしろだ」
「「は？」」
二人は後ろを向く。その視線の先には先ほどの修羅が待ち受ける。
「私の授業で私語とは良い度胸だな？」
バシーン！
そして制裁が下された。
ＳＩＤＥＯＵＴ
ＳＯＩＤＥシン
「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力溢れんばかりの十代女子もいることだしな。凰、オルコット！」
「な、なぜわたくしまで！？」
いや、自業自得だろ。
「専用機持ちはすぐ始められるからだ。いから前に出ろ」
「だからってなんでわたくしが…」

「アスランのせいなのになんであたしが…」

人のせいにすんなよ

「お前ららすこしはやる気を出せ。――アイツ等にいいとこ見せられるぞ？」

勝手に人を売るのはどうかと思いますけど？織斑先生

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリアオルコットの出番ですわね！」

こいつ馬鹿なのか？それとも単純なのか。いや両方だな。

「まあ、実力の違いを見せる良い機会よね！専用機持ちの！」

お前もかブル〇タス。お前等ホントに候補生か？

「それで相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカ共。対戦相手は――」

キィィィィン……。

戦場で培われてきた経験によるものかは分からないが嫌な予感がしたためすぐにデスステニィーを展開する。

視界の端ではフリーダムを展開したキラさんが飛んでいくのが見えた。

ＳＩＤＥＯＵＴ

ＳＩＤＥキラ

何かが空気を切る音が聞こえた。

上を向くと『何か』が落ちてくるのが見えた。

僕は即座にフリーダムを展開すると『何か』に向かっていく。

五メートルほどと飛ぶと肉眼で確認できた。

落ちてきたのはラファール・リヴァイヴを展開した山田先生だった。

受け止めるために腕を掴むが慣性が付きすぎているためリミッターが掛けられているこの状態では無理と判断。このまま行けば二人とも墜落する。地上なら何とかなるんだけど。

どうすればよいのか考えを巡らせているとアスランとシンがジャスティストデスティニーを展開しているのが見えた。

場所もちょうど列の端だし勢いも弱まってきてるから問題ない。

そして僕はアスランとシンの方にやまだせんせいを投げた。

ＳＩＤＥＯＵＴＯ

ＳＩＤＥアスラン

キラが山田先生を投げてきた。だがこれは予想の範囲内なので俺とシンの二人で山田先生をキャッチし、地面に降ろす。

しかし山田先生、何故空から登場してきたのですか。インパクトほしさにイカ〇スの登場シーンの真似でもしようとしたのですか。

「え、えっと、ヤマト君、ザラ君、アスカ君助けていただいてすみません」

「いえ、怪我がないようでよかったです」

「でも、もうあんなことしないでくださいよ」

「は、はい……」

「山田先生、早くこちらに来てください」

織り斑先生の所へ走って向かう山田先生。

「さて小娘共。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前達ならすぐ負ける」

結果的には負けるかもしれないがすぐに、と言うことはないだろう。

四月の一件以来、俺達の訓練メニューは個人技術よりも連携訓練を優先してやっている。いつも僚機がいるというわけではないが協働するさいに味方の足を引っ張るわけにはいかない。

さて、鈴達は……、どうやら頑張っているようだな。

今回二人が取った戦術は鈴が前衛で相手を釘付けにし後衛のセシリアが狙撃し、セシリアに意識が向くと衝撃砲で牽制するという基本に沿ったもの。

ちなみにビットは使わず狙撃にのみ徹している。理由は多対一には不向きの武装でセシリア自身あまり使いこなせていない。

どうやら終わるようだな。結果から言って二人は負けた。だが山田先生の機体も所々損傷しており辛勝といった感じだ。

その後、ＩＳの歩行訓練をやったのだが、まあこれについて語ることは何もない。一夏の班は何かあったようだが期する必要はないだろう。

おまけ

「ねえキラ」

「どうしたのシャルル？」
「あの出席簿ってそんなに痛いの？」
「うん。アレ中に何か仕込んでるんじゃないっかて思うよ」
「じゃあ、調べてみる？」
「でもどうやって？」
「えっとね、ゴニョゴニョ」
「え、でもそれって大丈夫なのかな？」
「物は試しだよ」
「わかった。それじゃやってみよっか」

同日夜

「取ってきたよシャルル」

キラの手には出席簿が。

どうやって取ってきかはスーパーコーディネーターの才能の無駄遣いとだけ言っておきます。

「凄いねキラ。本当に取ってくるなんて」
「結構大変だったよ。それに結構重い」

「重いの？じゃあ体重計に乗せてみて」

出席簿を体重計に乗せると、示した数字は

５０キロ

「「……」」

「これ本当に出席簿？キラこれ壊れてたりしないよね？」

出来れば壊れていて欲しい。でが現実は残酷だった。

「これ昨日買ったばっかりのやつだから」

「「……」」

再びの沈黙。そして二人はこう思った。

（（これを片手で軽々と振り回せる織斑先生は何者なんだろう））

結論。

「「僕達は何も見なかった」」

おわり

授業（後書き）

おまけは何となく思いついたのでやってみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4107q/

IS〈インフィニット・ストラトス〉～空の英雄達～

2011年8月7日23時31分発行